

京都市室町・西陣 言語生活の調査研究 (I)
祇園における

井 之 口 有 一

目 次

序 説 (§ 1)	120ペ
第1部 言語環境について (§ 2)	121ペ
A. 室 町 (§ 3)	121ペ
1. 調査地点 (§ 4)	121ペ
2. 室町商家の構造 (§ 5)	122ペ
3. 言語環境 (衣食住・贈答・しつけ・娯楽) (§ 6~10)	125ペ
B. 西 陣 (§ 11)	127ペ
1. 調査地点 (§ 12)	127ペ
2. 西陣機業の構造 (人的構成・M家の間取り) (§ 15~17)	129ペ
3. 言語環境 (労働・経済・階層・娯楽) (§ 18~22)	131ペ
C. 祇 園 (§ 23)	135ペ
1. 調査地点 (§ 24)	135ペ
2. 祇園花街の構造 (人的構成・家屋の構造) (§ 27~29)	136ペ
3. 言語環境 (§ 30)	139ペ
〔付〕 年中行事 (§ 31)	141ペ
〔付2〕 京都府方言資料日録	147ペ

序 説 (§ 1)

近代日本語は明治維新以来、東京語を中心として発展し、報道機関も主として東京語を中心とする共通語の普及に貢献してきた。そのため、平安時代以来の日本語の中心であった京都語は全国的な共通語の地位を失うことになった。しかし、京都は、日本の伝統的職業差による言語位相を知るにふさわしい地域・集団を最もよく保存し、全国的にみても、言語の職業差と階層差の研究にあたっての、一つのモデルケースとなるものと思われる。

われわれは、さきに『尼門跡の言語生活の調査研究』(昭和40年8月、風間書房)を著わし、京都の尼門跡の言語生活の諸相を明らかにした。平安時代以来、永く都のあった京都だけに、宮廷を中心とする御所の文化と言語が伝統的に保持されてきたのである。尼門跡語の研究は、宮廷中心の言語生活の伝承として、京都においてのみ研究できるという大きな意味を持っていた。

このほかにも、京都には、特色のある階層的言語生活が営まれていることにわれわれは注目していた。幸いにも、室町時代からの古い伝統をもつ室町商人の言語生活は、祇園祭で知られる室町(中京区・下京区)を中心として、今もなおその特色を保存している。また、平安時代か

ら宮廷工業地として始まり、著名な絹織物の生産地として知られる西陣（上京区）では、西陣職人の言語生活が営まれている。さらに、日本の花街のうちでも、代表的である祇園（東山区）には、多くの伝統的な言語生活が保存されているのである。このほか、京都には島原^{しまばら}の「くるわことば」、清水焼^{きよみず}の職人ことば、賀茂^{かも}の「社家ことば」など、貴重な未調査地域があるが、今回は標題の職業的集団を採りあげるにとどめた。これらの各職業集団は、それぞれ他地域における同種集団、たとえば室町は大阪の船場^{せんば}、東京の駒留^{こまどめ}、西陣は桐生^{きりゆう}・足利^{あしかが}、祇園は東京の柳橋^{やなぎばし}などとも比較検討することができる。

室町・西陣・祇園の言語調査にあたって、われわれが、言語環境を明らかにするために選んだ調査地点について、ここで簡単に説明する。

室町商人は京都市室町通りを中心とした伝統的商人で、白生地・織物類を取扱う問屋商人である。言語的には、京都の町ことばの正統は、室町通りを中心とする中京^{なかぎょう}ことばであり、室町の問屋街の商家の老人層のことばを中心としたものであるといわれる。

西陣職人は京都市上京区大宮今出川^{おおみやいまでがわ}を中心として伝統的機業にたずさわる。調査の対象は西陣の機屋、特にその織手^{おりて}である。

祇園の花街は祇園社（八坂神社^{やさか}）の西、鴨川^{かもがわ}の東、四条通りをはさむ区域で、この地域では、多くのお茶屋^{ちやや}（揚げ屋）と旧称子方屋（置き屋）があり、芸子・舞子が生活している。

以上の三つの集団には、永い伝統によって培かれた気質が認められる。室町商人の気質、西陣の職人氣質、祇園の舞子・芸子の気質は、それぞれの地域集団の社会構造や人間関係、衣食住、教育やしつけなどにしみこんでいる。われわれはこれらの地域特有の気質の反映している言語環境をここに明らかにしようとしてとめた。

本稿においては、以上の三地域とも、伝統の形態をよく保存している昭和初年を便宜上選んで、その状態を再構成することにとつとめた。なお、特殊な読み方や各集団におけるいい方は「^{サンジ}山寺」「^{イトヤ}生糸問屋」のようにカタカナのルビで示した。

この調査研究は、井之口有一（代表者）・中井和子・堀井令以知・出川光治・木村恭造によって行なった共同研究の成果である。なお援助と協力を与えられた多くの方々に心から感謝するものである。

第1部 言語環境について（§2）

A. 室町（§3）

1. 調査地点（§4）

調査地点（図1）に示すように、室町問屋商人の地域は、三条室町を中心にして、北は^{おいけ}御池、南は^{まつばら}松原、東は^{たかくら}高倉、西は^{にしのだういん}西洞院までのひろがりであった。それは八坂神社の氏子の中、^{あと}後の祭り（祇園祭）に属する地域であった。ところが、商業の発達につれて、その地域は八坂神社

の四至の範囲をこえて、徐々に広がることになった。しかも、かつての中心地であった、三条室町（中京区）から、その中心は次第に南に移動、戦後はその傾向がいよいよ強い。現在では、四条室町（下京区）にその中心は移り、五条通りには現金売りの店が立ち並び、四条から南の地域の方がむしろ勢は盛んである。

終戦前、室町商人の中心は、三条室町にあった。商人たちの言によれば、三条室町近くにある六角堂がほぼ京都の中心にあたり、六角堂にあるへソ石（要石）は、京都の中心だということである。六角堂は、かつて室町時代、商工業の徒のうち、^{しもぎよう}下京町衆といわれる人々のよりどころ

であった。京染呉服を扱う室町商人は、この下京町衆の出身であったと思われる。上京町衆の存した地域は、現在では、なにがしかの堀川材木商や数軒の菓子司等を残すのみで、ほとんどが住宅街に変わってしまっている。ひとり下京町衆の存した地域のみが、商工業の町であり、しかもその大部分が、室町筋呉服問屋なのである。したがって六角堂が京都の中心だとする彼等の言には、自分たちこそ、京都の中心的存在だという誇りがこめられていると思われる。

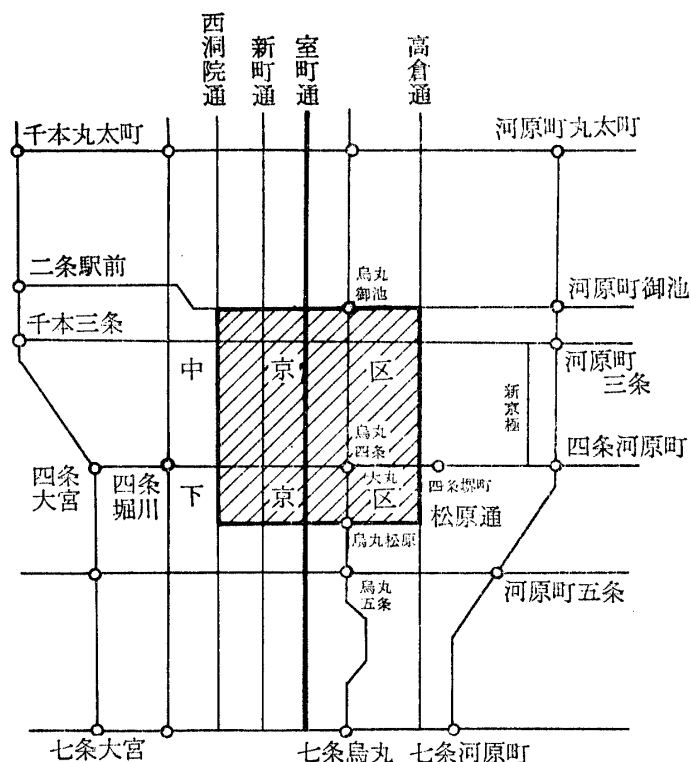
2. 室町商家の構造（§5）

室町筋には、昭和13年4月に大問屋が約700軒密集していた。ここは、京染呉服問屋を中心とするが、そのほかに西陣織を扱う店、関東もの（桐生・足利・十日町・米沢その他の関東地方の産した織物類）を扱う店、帯地を扱う店などがある。なお、最近では、服地類・雑貨などを扱う店もある。しかしここでは、その中心である京染呉服商について考えてみることにする。なお、室町織物問屋の成立と発展については『家業—京都室町織物問屋の研究—』（立命館大学人文科学研究所、1957・3刊）に詳細な報告がある。

京染呉服問屋は、商人であるとともに、多くの加工業者（職方）^{しよくかた}をかかえて、加工を行なう小さい規模の産業資本であるといえる。次に、室町商人の構造図を示す。

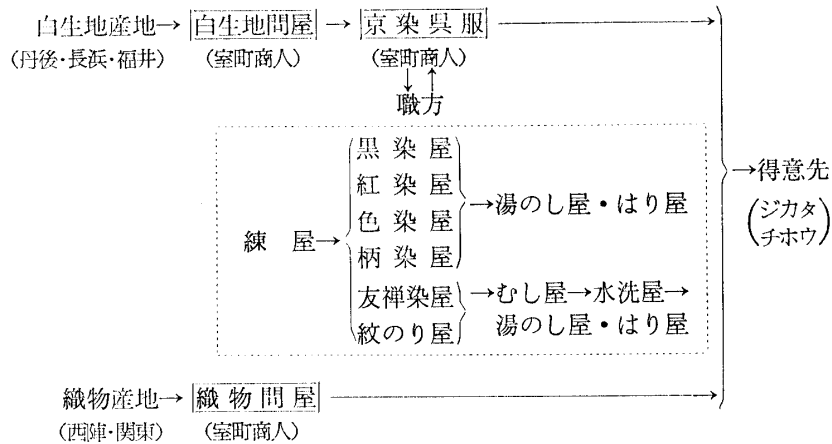
京染呉服商は、原料である白地を職方に回して加工し、それによって加工着尺・振袖・長襦袢などをつくり出し、それを商いするものである。これは、純粹の商業資本がものを移動し、その需要、供給の変化に応じて商業を行なう投機的なものとは異なる。したがってそれは、職

室町調査地点（図1）



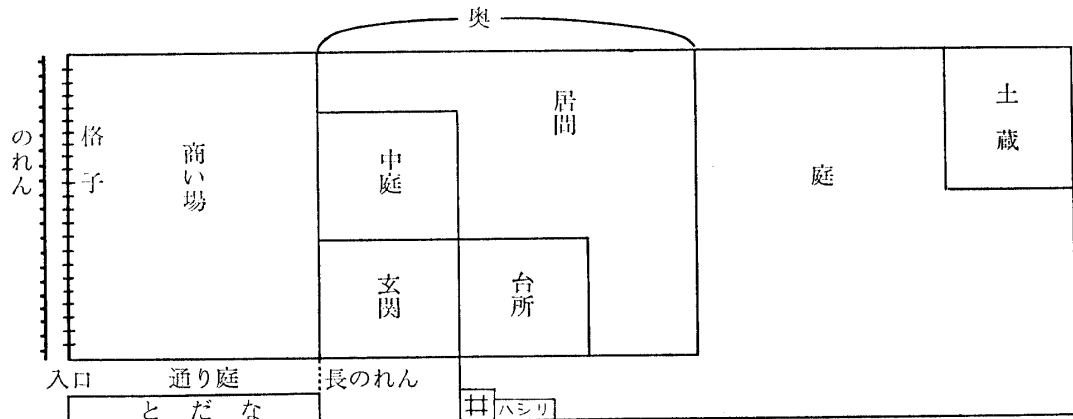
方という職人の町をもまた、その配下に加えるのである。このことは分散マニファクチュア

室町商人の構造図（図2）



の一種ということもできよう。京染呉服商は、現在では、東は高倉通り、西は西洞院通りに広がっている。なお、職方の町は西洞院から堀川に及び、北は御池通りをこえて、丸太町さらに今出川辺にも広がっておる。これはかつての上京町衆の地域にも散在していることになる。しかも、職方中の高級なものは、御池通り以北に位置するものが多く、かつての上京町衆の流れをくむかとも思われる。京染呉服商に原料としての白生地を売る、白生地問屋というものが、産地と京染屋の中間にあるが、これこそ物品の移動のみによってあきないをする商人であって、その性格からいって貸資本に似るのである。しかし最近では、白生地のみを扱うのはほとんどなくなり、加工もあわせ行なっている。室町問屋筋には、現在では近代的鉄筋建築や商店と片側住居との結合した旧来の構造とがある。後者は図3のように、昔は表は格子戸がはまり、屋号を白く染め抜いたのれんが、はりめぐらされていた。その格子をくぐって内部に入ると、「通り庭」があり、その横に「商い場」がある。しかし、商い場に隣接した通り庭には再びのれんがかかり、のれんをくぐると、今度は玄関があって、そのさきには「奥」の世界がある。（図3参照）こののれんに対して、昔は、「三条室町長ののれん、おかゆかくしの長ののれん」とい

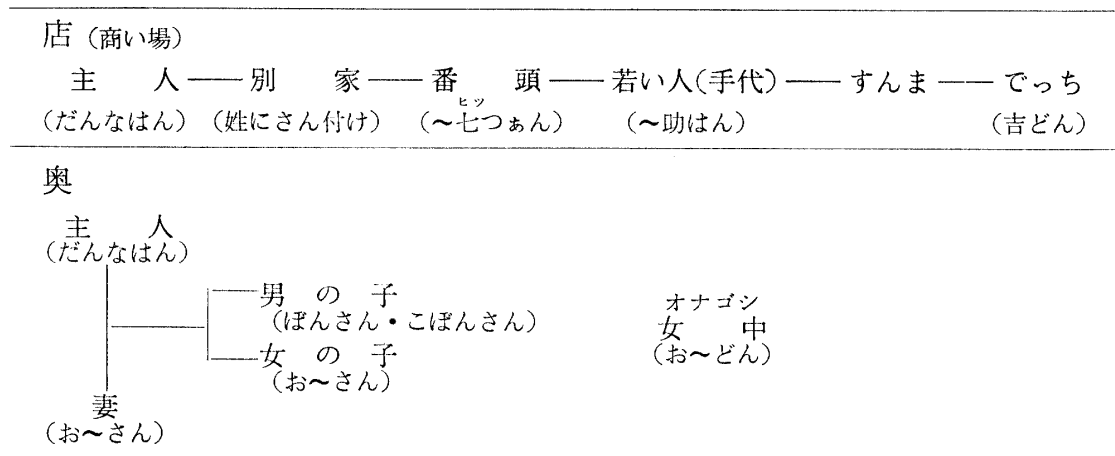
室町問屋の間取り（図3）



われていた。そのようにいわれたのは、玄関の次に台所があり、それは長のれんの向こうにあって、そこで奉公人のまかないが行なわれていたからである。室町商人はシブチンといわれ、奉公人の食事は、朝はうすいおかゆとされていたので、それを皮肉った言い草であった。なお玄関の横には、中庭があることが多く、中庭によって店と奥の建物は遮断されることになる。奉公人は、階下の商い場や階上の商い場に寝泊りしたが、中庭によって奥の世界との間には隔てが存していた。

「表」の世界が旦那ハンを中心とした商いの世界であるのに対し、奥の世界は、これまた旦那ハンを中心とする、家族と女中衆の世界であった。この表と奥の世界における関係を図で示すと次のようである。

室町商家の店と奥(図4)



主人は、子どもたちを除けば、だれからも「ダンナハン」という敬称で呼ばれるのに対し、妻の方は、名前で呼ばれるしきたりである。子どもたちを除いて「お麻^{あさ}さん」のように、名前(麻江)に「お〜さん」の構成で呼ばれるにすぎない。「奥さん」などという敬語は、現在では長屋のおかみさんに至るまで用いられているのであるが、古くは官員さん、お医者さんなどといった名家に限られ、商人の家では、すべて名前でよばれたのである。これは、主人に対して妻の地位が一段低いことを表わすものと思われる。男女間の言語使用差は男の子と、女の子の呼び方にもあらわれる。男の子が、「ぼんさん」「小^こぼんさん」と敬語でよばれているのに対し、女の子の方は、これもまた「お花さん」のように、名前を呼ばれるのである。店における奉公人の呼び方は、階級に応じて名前の下に、吉一助一七をつけて呼ばれる。(たとえばT家では、忠次郎さんは「忠吉どん一忠^{ひつ}七つあん」)しかも、最初は、「どん」をつけて呼ばれたものが、番頭に至ると、「はん」「さん」づけに昇格する。妻や女の子が「さん」付けであったのと考え合わせると、女は、番頭と同格ということであろうか。このように、格づけされてそれぞれの位置を占めた人々が、その格にふさわしい京ことばを使って応対しあうのであるが、実際の用法に関しては、別の機会に述べることにし、ここでは、それらの人々が、日常どのような生活をしていたかという点に関して考察したい。

3. 言語環境（§6）

(1) 衣食住（§7）

まず、表^{おもて}の世界の人々の衣服について述べる。戦前は絹物を着用するのは、主人に限られていた。最下位にある丁稚^{てつち}は、デッチ^{じま}縞という細かい木綿縞の着物を オシキセとして与えられる。それを着用し、黒の木綿の角帯をしめ、黒の前垂^{マイダレ}をすると丁稚の姿ができあがる。丁稚の仕事は、荷づくり、走り使い、掃除その他である。丁稚から手代に昇格すると、縞はやや荒くなる。そして、番頭になると、羽織が与えられた。番頭は、羽織を普段は着用しないが、正月や盆・暮その他の祝日には着用することができる。

奥^{おく}の世界は、女の世界であるが、「京の着だおれ」はここで最高に発揮されるのである。しかし、「京の着だおれ」は、決して華美を意味しない。地味^{コート}で凝ったものということに眼目があるかと思われる。しかも、折に合わせて適切なものを着るのが大切であった。正月・盆・暮といった年中行事に合わせた晴着、結婚式・葬式その他の吉凶行事に合わせた着物をきちんと着るとともに、分に応じた着物を着ることが要求された。たとえば、別家の妻が本家にあいさつに行く場合、流行を追ったもの、華美なものなどを着てはならなかった。もっさりとした野暮なものこそ適切と考えられたのである。家の格に応じた着物を着、格の上の人と同席する場合には出すぎないように、ひかえめにすることこそ大切であった。これは、言葉づかいにおいても当然要求されたことである。

さきにのべた「おかゆかくしの長ノレン」の表現にみられるように、食生活は質素であった。「京のお茶づけ」とか、「まあ、お茶づけでもどうドス」といった「お茶づけ御飯^{ごはん}」もまた、この土地の質素さを示すものと思われる。そして、食生活にも、身分に応じた格付けがあった。主人と妻の食事の差、ボンサンと小ボンサン^コの相違、男の子と女の子の差、店においても、番頭とそれ以下の者の食事には区別があった。また、献立は規則正しく固定されていた。毎月1日と15日には、アズノゴハン（小豆の御飯）に、オコンマキ（昆布巻）とオナマス、月末は、オカラを食べる。（これはカラをふまぬようにという言い伝えからである。）その他アラメを食べる日（そのゆで汁を門に流す、悪魔退散の意味）とか、いろいろ日によって食べるものが規定されていた。その上に、さらに年中行事的な規定がある。正月には、一日には何、二日は何といった風に、行事に伴って食べるものが決まっていた。このように献立を考える必要もないほどに毎日の食生活は固定されているのである。何事につけても、しきたりと格を重んじるというのが、この世界に一貫して流れる慣習であったかと思われる。京都のこの界限に対する外からの悪口として、「オアガリヤス」とか、「ドウゾ、オ茶ヅケデモ」とか、その他いろいろすすめられても、決して手を出してはいけない、といわれている。しかし、この中に住む人々にとっては、自然にわかる慣習なのである。別家が本家で食物をすすめられた時の作法、同格どうし家の作法、格の上下のある場合などにおいて、すすめ方も、それをうける方のあいさつも異なり、それがはずれた時には非難をうけることになる。すすめられても食べてはいけ

ないとは決まっていないので、食べなければならない場合もあるのだと思われる。

商人の発生当初、すなわち室町時代においては、かような窮屈な作法はなかったのではあるまいか。その後、商業の中心が、京都から大阪、江戸に移るに至って、京都は、社会の第1線からとり残された。しかし、その昔に培われた京染の高級技術はこの地にのみ存したのである。江戸時代という固定化の時代を通じて、ことさら、窮屈な作法を生んだのではないかと考えられる。「室町もかわった」とは、現在よくいわれることであるが、他の商いの町に比べると、なお、保守的な傾向は、今でもかなり強いように思われる。

住にもまた、衣・食で述べたと同じような慣習が行なわれている。食事の時の人々の座席のきまり、寝る場所の限定等、身分に応じて、すわる場所も定められているのである、座敷へ入ったことのない奉公人が「一度座敷へ入りたい。」というのも、このような住に対する階級性を示すものである。妻は、店のことには口出しはしない。奥の世界におけるとりしきりを、年中行事的に正しく行なうのが妻の役目であった。大阪の船場の主婦に比して、このことは京室町の特色であったといわれている。

(2) 贈 答 (§ 8)

このような儀礼が支配するこの社会では、贈答は非常に大切なものである。そしてここでは分をこえないのがもっとも重要な要素である。目下から目上に対する贈り物は決して、大げさであってはならない。また目上は、目下から贈り物をうけた時は、それ以上の「お返し^{カヤ}」をする。ある時には倍にして、時としは五倍にさえするといわれている。京都に住むと、町内の付き合いに至るまで、家の間口の大きさなどにしばられるといわれるが、間口が広ければ、それだけ大家としての態度が常に要求されてきたのである。大家であれば、それだけの尊敬が常に周囲から払われたが、それに対処するためには、大家としてのつらさがあるわけである。

(3) し つ け (§ 9)

室町における「しつけ」は、年中行事的なきまりをわきまえ、また、分に応じた節度を、起居動作すべてにわたって、行きとどかせることにあると思われる。たとえば、主婦は、自分の主人が、いろいろの席につらなる場合、席の性格を考えて、それにふさわしい服装をさせることが要求され、奉公人に対してもそうである。また、自分の着物の柄^{がら}の好みについても、その人のしつけがものをいう。地味^{こゝろ}で目だたなく、しかも品^{ひん}がよいということが大切であったと思われる。華美な柄をはでなし方で着るような人は、「芸者のようだ。」として非難される。

また、客の接待や訪問の場合も、社交は主人たちを中心に行なわれるのが普通であった。主婦は、座敷の掃除、飾りつけ、ごちそうなどに気を配るべきである。室町的主婦は人前で話すことを極端にきらう向きが多いが、それは、この社会に育った人のしつけのいたすところでもあり、また自分の意見をもっている人でも、人前で出しゃばらないのが美德とされたからである。

(4) 娯 楽 (§ 10)

室町商人においては、趣味を養うことが大切であったと思われる。近ごろのように、商売の

競争が激しいと、日常に忙殺されて余暇もないであろうが、昔は商売はかなり安定していた。したがって趣味を養う余暇も多かったわけである。茶の湯・俳諧・謡曲・仕舞などが主人の教養であり、娯楽であった。主婦や、その子弟もそれらのものを習う家は多かった。また、室町商人は、祇園との関係も深かった。そして、旦那の中には、それらの芸子を囲う人もあったといわれる。ただし、芸子を家に入れるようなことは極端に嫌われていた。家の格や秩序が乱れるのを恐れたためである。

以上のように、室町商家の奉公人の生活はきびしかったが、現在では、奉公人を社員と呼び、生活も近代化され、事情は一変している。

B. 西 陣 (§11)

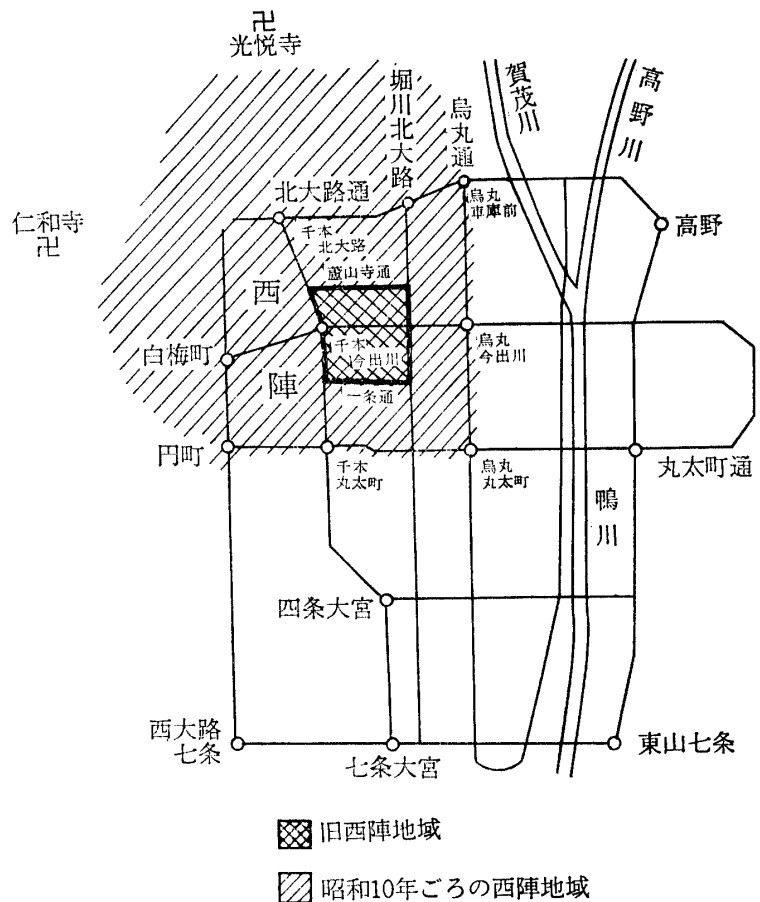
1. 調 査 地 点 (§12)

(1) 調 査 地 点 (§13)

にしじん(1) かみぎよう
旧西陣と呼ばれるのは、上京
おおみやいまでがわ
区の大宮今出川を中心とした地
域である。その範囲は、北は盧
サンジ いちじよう
山寺通り、南は一条通り、東
ほりかわ せんぼん
は堀川通り、西は千本通りに
囲まれた地域である。昭和10年
(1935)ごろの西陣の機業地域
は、さらにそれよりも広範囲に
及び、東は烏丸通り、西は西大
じ カラスマ にしおお
路を越えて御室まで、南は丸太
おむろ まるた
町通り、北は北大路を越えて鷹
がみね かみがも たか
ヶ峰・上賀茂に及んだ地域であ
る。

この広域にわたる西陣機業地
域には、昭和8年(1933)、力
しよつき てげた
織機6,430台、手機10,874台、
計17,304台の織機があった。ま
たそのうちジマエは、2,287戸、
チンパタヤ
賃織業は、5,374戸、計7,661戸

西 陣 調 査 地 点 (図5)



(便宜上、現在の電車路線をも添えた。)

(1) 『山州名勝史』による地域

である。（大槻喬編『西陣織物同業組合沿革史』昭和14年刊による）

なお、西陣の補助業者（^{シダシヨク}染糸業・^{ソメヤ}綜紬業・^{サンヒライヤ}整経業・^{タテヘ}紋様業等）・^{モンヤ}生糸問屋は、主として旧西陣地域の中に居住している。

この旧西陣地域の経済の中心地は、大宮今出川である。^{イトヤマチ}大宮通りには、西陣織物の原料となる生糸問屋が建ち並んでいる。生糸問屋は、北は^{いつつじ}五辻通り、南は^{ささやちよう}笹屋町の間の^{イトヤマチ}大宮通りに店舗をはっている。また、今出川通りには、日本の大小銀行の西陣支店がずらりと建ち並び、生糸問屋・各銀行を見下ろすようにして、西陣織物館（大正4年完成）が建っている。

（2）西陣の変遷（§14）

『応仁記』によれば、西陣という地名は、^{とうじん}応仁の乱中、^{にしじん}東陣に対して西陣と名づけられたことに由来する。その後、10年にしてすでに『蔭涼軒日録』（李瓊真蕊録、明応2年〔1493〕成）には、「西陣」が地名としてあらわれている。

応仁の乱勃発とともに、^{さかい}乱を避けて堺に下っていた京都の機業家が、乱後、現在の^{しん}今出川新町の北の^{しらくもむら}白雲村に^{しんざいけ}新在家を作り、機業を始めた。（黒川真頼著『工芸志料』大正15年刊）しかし、白雲村は水質が悪かったので、水質の良い西陣の地に、秀吉の保護のもとに移ってきた。（黒川道祐著『雍州府志』貞享3年〔1686〕刊）

西陣の地域は、如是相白慧著『山州名跡志』（元禄15年成、正徳元年版『京都叢書』所収）によれば、江戸時代前期には、東は堀川、西は千本、南は一条であり、北は筆者の推定では盧山寺に囲まれた地域であったと思われる。それが、江戸時代をくだるにつれて、東は堀川、西は北野、南は^{なかだちうり}中立売、北は^{だいとくじ}大徳寺と、その地域を広めつつ江戸末期に及んだ。（『京都御役所向大概覚書』享保年間成）

西陣の中心地である大宮今出川を、江戸時代には「^{せんりようがつじ}千両ヶ辻」（橋本経亮著『橋窓自語』享和元年〔1801〕成）といった。そこには、『西陣天狗筆記』の「西陣図」によると、三井呉服店の西陣支店があり、生糸問屋があった。

一方、延享2年（1745）西陣高機屋仲間一同業組合成立の『西陣高機織屋仲ヶ間条目』によると、西陣の織物技術の流出を防ぐ制約も厳しかった。『桐生織物史』さらに、『西陣天狗筆記』（井関相模介政因録、弘化2年〔1845〕成）の「ぜんまい騒動」のように、機械化を避け、閉鎖的であった。しかも、一条以南・千本以西の^{いざりばた}壁機を^{にしばた}西機といい、盧山寺以北・堀川以東の^{かみばた}壁機を上機^{たかはた}といって、中心地の高機を織る地域と区別していた。（『西陣天狗筆記』）なお、江戸時代を通じて、西陣^{ヤケ}(2)・京都^{ヤケ}(3)・天保の飢饉⁽⁴⁾・絹布使用禁止令⁽⁵⁾など、西陣のうけた被害も多かった。

（2）享保15年、西陣108町、7千余機焼失（神沢貞幹著『翁草』安永6年〔1777〕成）

（3）「天明八申年大火之節弟子奉公人共他国へ離散仕候」（『高機日記』嘉永5年〔1852〕成）

（4）「殊に西陣織屋共織物不捌」（『新古今聞集』文久3年〔1863〕成）

（5）天保改革触書によると、「一、衣類男女とも総て綿服に致すべき事。一、縮緬類・襟・袖口にも無用の事。一、唐物類一切着用致すまじき事。」（『浮世の有様』弘化3年〔1846〕以後）

また、帝都東遷（明治元年）以後の西陣は、その衝撃をぬぐうため、急速に機械化の方向をたどり、高機（空引機ともいい、ジャカード≪Jacquard≫の役目をする空引職人のいる織機）にかわるジャカード機技法をフランスから導入した。さらに、大正になってからは、力織機が脚光を浴びはじめ、その普及奨励（大正9年・織機奨励規則）に、当地の織物同業組合が努力した。しかし、その生産形態は分業によってなされる零細な家内工業的な色彩が強い。

2. 西陣機業の構造（§15）

調査の対象として、西陣の絹織物業者の中でも典型的なM家を取りあげた。以下、昭和10年（1935）ごろのM家の生産組織と人的構成 および 家屋の構造とを事例的に示すことにする。

この組織図（図6）からもみられるように、西陣機業家の人的構成を明らかにすることはむずかしい。なぜなら、西陣機業がきわめて分業的な生産工程をたどるからである。

第6図は、M家が織物を生産するときの組織図である。作図にあたっては、本庄栄治郎氏の『西陣研究』を参考にした。この組織図に示したM家のばあいは、ある程度、典型的な西陣機業家の一つと考えられる。その他、業種によっては、箔屋とか、別の業者と関係するばあいもある。

M家を中心とした組織（図6）

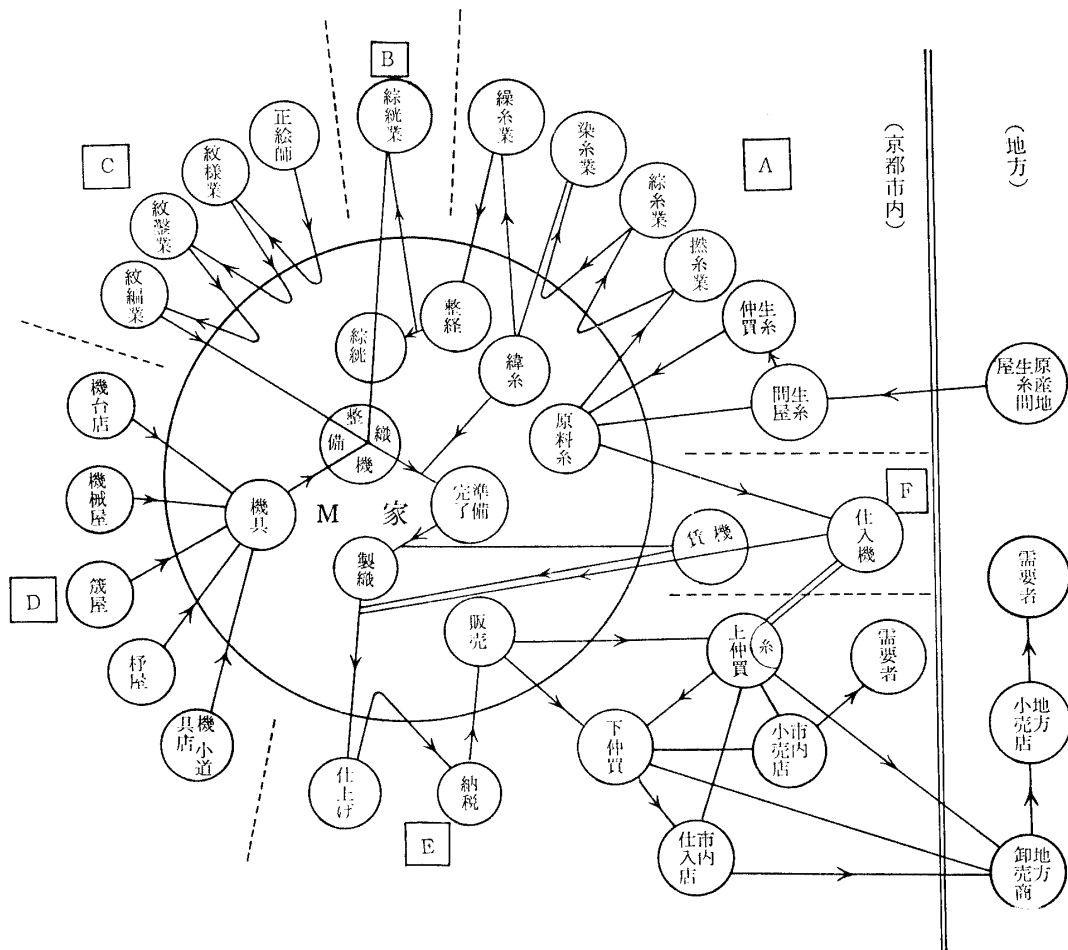


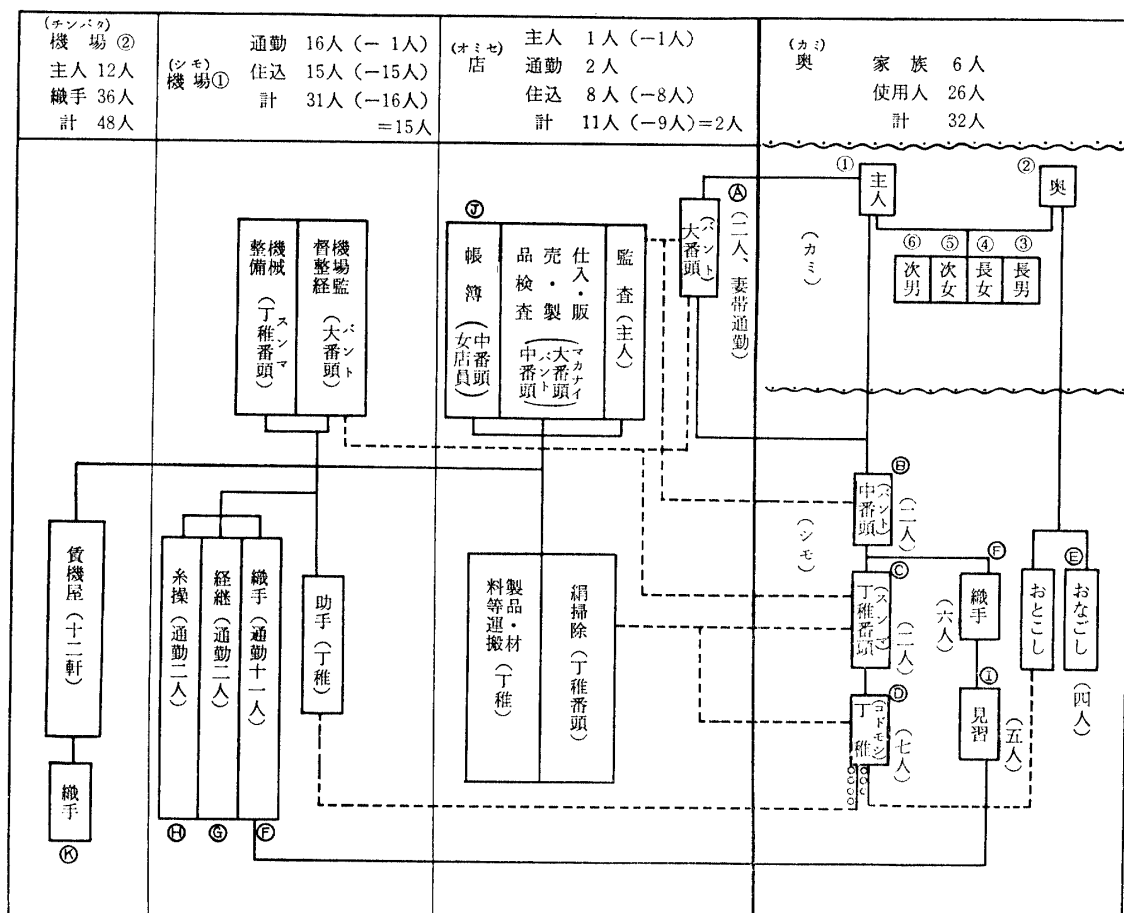
図6の矢印は工程の順序を示したものである。[A]は生糸を処理する業者。^{イトヤ}（生糸問屋・生糸仲買・^{ヨリヤ}燃糸業・^{ネリヤ}綜糸業・^{ソメヤ}染糸業・^{イトクリ}繰糸業），[B]は，^{ヌキイト}緯糸を通す杼道を作るために，^{ヒミチ}経糸を動かす用具を整備する。（^{サンヒライヤ}綜統業）[C]は，織物の紋様に関する仕事。（^{エカキ}正絵師・^{モンヤ}紋様業・^{ピアホリ}紋整業・^{モンアミヤ}紋編業）[D]は，織機および織物道具を整備する。（^{ハタダイク}機台店・^{メカニク}機械屋・^{おさや}箆屋・^{ヒーヤ}杼屋・^{ハタドウグヤ}機小道具店）[E]は，仕上げ（^{ユノシヤ}仕上げ）販売をする。[F]は，M家が製織を依頼する。（^{ちんばた}賃機・^{しいばた}仕入機）

(1) M家の人的構成 (§ 16)

M家の構成員は97人であるが、実際にM家に住み込んでいるのは、家族6人、使用人26人、計32人である。（他は賃機業者と通勤者である。）

次の図7においては、家族には○の中に数字を入れて示した。(例②) 使用人については○の中にA～Kで示した。(例④) なお、①～⑥を上と呼び、④も上と同等にあつかわれた。⑧～⑩を下と呼ぶ。⑧は、賃機屋なので別にあつかわれた。

M 家 の 構 造 (図 7) …兼務 一系統 (計97人)

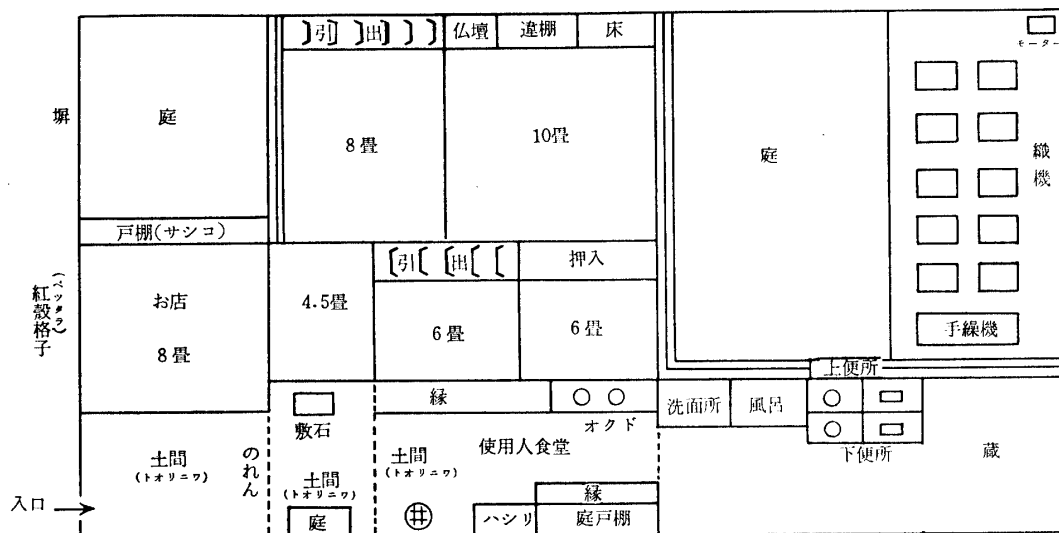


(2) M家の間取りと賃機業K家の間取り (§ 17)

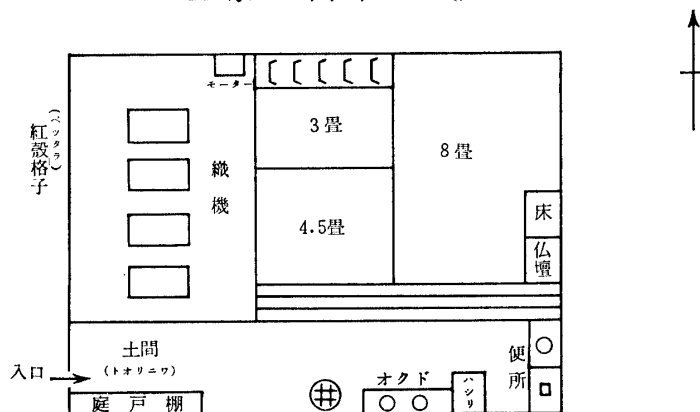
M家の家屋は、工場法が、大正5年に実施されたときに改造されたものである。これは、西陣の典型的な機業家の間取りをなしている。(図8) また、K家も典型的な賃機業者の間取りに

なっている。（図9） なお、M家は総2階建て、K家は中2階建ての建築である。

M家の間取り（図8）



K家の間取り（図9）



3. 言語環境（§18）

西陣機業の言語環境を総合的に記述することは困難である。そこで、M家の構造図7に示した、⑤織手・⑥経継・⑦糸操・⑧賃機屋における昭和初期の言語環境を中心にして述べる。

織手の名称は、永正10年（1513）の「綾織物類号厚板物事」（西陣古文書）に出ている。当時の織手は男子であった。明治以後、ジャカードが導入され、女子が織手となってきた。現在職場では、ウィバーと呼ばれることになっている。

経継は、織物が織り上がったのち、次の経糸と古い経糸とを継ぐことをする職人である。この経継は織屋から織屋へと仕事を求めて歩く。そのために、西陣の言語生活を比較的総合された形で身につけている。

糸操は、織物の緯糸（よこいと）や経糸（たていと）を繰る仕事をする。これは、老人とな

った織手とか、織手見習いの者がこの仕事をうけもつ。

賃機屋は、機業家から織機・原料糸等いっさいを貸与されて、労働のみを提供する業者のことである。

以上の職種について、労働・経済・階層・娯楽の各方面から言語環境を記述する。

(1) 労働について (§ 19)

就業時間は、季節によって違うが、朝7時ごろから仕事をはじめて、1日平均8～12時間働いた。なお、休業日は毎月1日と15日の2日間であった。(湯浅長次編『西陣郷土読本』昭和15年刊)

8月ごろになると、西陣の路地を「泣き豆売り」が、さびしい声で「ウデマーメ、サヤマメ。」と売り歩く。その売り声を聞くと、奉公人は、主人^{ダンナヘン}から、「さあ、みんなサヤマメ食べや。」と、いついわれるかと、毎晩びくびくしている。そのさや豆を主人から食べさせられると、翌晩から夜なべがはじまるからである。夜なべは夜の9時ごろまで働かされるから、奉公人たちは、そのさや豆を「泣き豆」と呼ぶのである。

今宮神社^{いまみや}の朝参りをする11月1日からは、夜の10時ごろまで、夜なべが延びる。それで、奉公人たちは「朝参り」が近づくことを悲しむ。なお、12月に近づくと、夜明け近くまで仕事をさせられることがある。それを「シラ」という。その仕事のつらさを奉公人たちは、次のような機織唄^{アテウタ}にうたいこんでいる。

死んでしまいたい霜月師走　生きて戻りたいお正月
宵の宮川夜中のますだ　いずまんしもたら鶏^{とり}が鳴く
寝たいねぶたいこうねぶとては　馬に五十駄の金もいや

このように、奉公人に過重な労働をしいなければ、経済的に立っていけなかったのが西陣である。それで『西陣天狗筆記』にも、「織屋第一の元手といふは年季奉公人也。第二は紋織物は紋模様也。第三……。」と記されている。

こうした過重な労働は、年季を明けた職人をして、職場を転々とさせる結果にもなる。このような職人のことを「皿ネブリ」という。

この過重な労働に対して、機業家は毎月5日・10日・15日・20日・25日・晦日を「ヨンマ」にしている。「ヨンマ」とは「暮限りにて休職にするをよんまといふ。」(『西陣天狗筆記』)のである。ただし、朝参り以後は、10日・晦日には「半織り^{ヘオリ}」といって、夜の9時ごろまで織らされた。

(2) 経済について (§ 20)

賃機業者の月収は昭和10年ごろには、35円～60円であった(『西陣郷土読本』)。賃金は、織れ高払いであるから、時間の許すかぎり働かなければならない。それで、来客があると、「がたり三文や。」という。これは紅穀格子^{ベツタラ}の隅にある戸をあけて客が来ると、機織る手を止めなければならない。手を止めている間に、3文の損をするという意味である。このことばのあとに、「ごきんとに来て」という。「ごきんと」(御金当)とは、この場合「また来た」という意

味である。「金当」は「当金」^{ゲンナマ}の倒語である。これは『東海道中膝栗毛』の巻七にもある「御きんとう」と同じ語形であるが、意味内容は違っている。

また、賃機業者は、「世の変遷に伴ふ流行の余波と機業組織の不備、大機業の圧迫とは絶えず機業関係者の生活に影響して経済上極めて不安定な地位に置かれてゐる」（『西陣郷土読本』『西陣同業組合沿革史』）ものである。経済的に恵まれなかったことが、次のような機織唄を生むことになる。

ほれてつまらんひぼ引織手⁽⁶⁾ 五厘たばこが買いかねる
あぜやり下手でもやりくり⁽⁷⁾ゃ上手⁽⁸⁾ 今朝も七つ屋⁽⁹⁾でほめられた

このように、生活が苦しかったことによって、いろいろな不正が行なわれる。たとえば「仏も三匁^{もんめ}」という諺がある。これは、賃機業者が機業家からあずかっている絹糸^{シライト}を、どんなに仏のような人でも、三匁はくすねるという意味である。また、絹糸をくすねることを「ピンいく」という。次にくすねた絹糸を二番屋へ売りに行く。二番屋には「引越⁽¹⁰⁾・屑糸・高く買います」と書いてある。こうしたことがあると、できあがった織物は、渡した絹糸の目方よりも、ずいぶん少ない。それを機業家では「この織物^{オキス}さぶいな。」といい、そのくすねた絹糸を二番屋へ売る人を見ると「あれ、番助^{ばんすけ}や。」とよぶ。

また、西陣機業全般に対して、「このごろ、黒屋^{くろや}が繁昌しとりまんな。」といえ、不景気ということである。西陣では、黒系統の織物が売れるときは、西陣機業が不振の状態にあるといわれている。これは、各人の趣味に合わせた織物を生産しようとする小企業の性格によるものである。と同時に、ちょっとした好転によっても、賃機業から機業家になりうる可能性をもっている。だから、西陣の人は、不安定な経済生活にも耐えていかれるのである。「織屋^{デンボー}と腫物は大きくなると潰れる」ということばも、この間の事情を物語っている。

(3) 階層について (§21)

機業家の家族を「上^{かみ}」とか「お上^{かみ}」といい、使用人を「下^{しも}」という。下が複数のときは「下々^{しもしも}」という。西陣では、よく「上^{かみ}の者と下^{しも}の者^{もん}とでは、町人と大名の差どすな。」ということがいわれる。

旦那さんより奥さんよりも

お気にいりたい若旦那

この機織唄には、上^{かみ}の人になりたい西陣の女奉公人の気持ちがよくあらわれている。それに上^{しも}の人が下^{しも}の人に使うことばを「したながれにいう」という。「下流れ」の表現の一つに「～おしたか。」（「してしまったか」の意、「お」は親愛の接頭辞。「糸繰りおしたか」のようにい

(6) ジャカードを手動によって回転させる旧式手織機^{バツタン}を織る、能率の悪い低賃金の織手。

(7)(8) 糸繰りの仕事で、アゼヤリ（畦遣り）をヤリキリともいう。この歌は、アゼヤリとヤリキリ（やりくり）をかけている。

(9) 質屋^{ヒチャ}のことを、七屋と字をあて、ナナツヤといったもの。

(10) 引越糸^{ダライト}の略。古い経糸をとり除いた糸のこと。これをほぐして真絹を作る。

う。)がある。このいい方は、下々の人が使ってはならない。

食生活においても、使用人は土間で踏台に腰かけたり、^{ニワ} 踞^{クラカケ}って食事をする。しかも、朝はお粥^{カイ}、昼は野菜煮^{あらめ}、夕食は何日めかに荒布に揚豆腐^{フゲドフ}、鯀^{にしん}と昆布^{コブ}、小芋と棒鯉^{ぼうだら}、鰯^{いわし}と野菜煮などに決まっていた。西陣では、糸が喉につくので、その糸をおろすために、あらめを食べるといわれている。これは、主人が奉公人にする「食封じ」の一つである。また、にしんには渋味がある。それでシブーといい、昆布は、その色の濃いところを、物事をしまつする色としてコブーという。これを食べ、主人から「世の中を渡るには、シブー・コブーいけ」といましめられる。これも食封じの一つである。

また、月末には「そば」と「おから」を食べる。そばを食べるのは、来月の集金が順調にくという意味をもっている。

しかし、ヨンマの晩には、酒日^{さかび}といって、織手と番頭には酒一本とさしみがついた。けれども、家族は毎夕食に、料理屋からとった御馳走^{テンヤモン}を食べた。

とにかく、奉公人が常に空腹な状態におかれていたことは、次の機織唄からもうかがわれる。

お腹^{なか}へりやまこれから帰^いんで おひつ中山嵐山

「山」は、西陣では仕事を終わることをいい、この「山」を歌の中に織り込み、しかも京都の地名をもじったものであり、「空腹なので早く仕事をやめさせて欲しい。」との意味である。

また、次の機織唄は、機業家の食封じによって生まれてきた女奉公人たちを歌ったものである。

織屋小女郎^{こめろ}に米の飯はすぎる 百で二三升のぬか食わせ
 鮎^{アイ}やもろこはめめずで釣れる 織屋小女郎は薯で釣る
 今朝も今朝とてお粥^{カイ}でけんか わしの粥には薯がない

お粥に薯がはいっている家はよい。西陣では、よく「目玉の浮くようなお粥」とか、「お粥の黒豆が箸ではさめない。それは自分の目玉がうつっていた。」などともいわれた。

そのほか、休日やヨンマは、織手や番頭に与えられ、奉公の最初にする管巻や織手見習には与えられない。このように上下の階層差は大きい。

今晚よんま晩じゃ織手さんは休み わたしゃ管巻^{スキマキ}よんまなし
 あたごさんでは土器^{カーラケ}投げる わたしゃ機屋^ヒで桴⁽¹²⁾を投げる

これらの機織唄からも、管巻や織手見習には、ヨンマや休日が与えられていないことがわかる。なお、管巻や織手見習は子守や女中・男衆^{オトコジ}の役もさせられていた。

(4) 娯楽について (§ 22)

経済的に変動の多い西陣では、「一時的の享楽^{かたむ}に傾向くようで毎月一日・十五日の定休日には寄席・常設館等は此の種の人が大部分を占めている。」(『西陣郷土読本』)のである。西陣地域

(11) 主人が使用人に、食事の出費を防ぐためのことば。

(12) 手機を織るということ。手機は桴^ひを左右に投げて織るところからきた。類似のことばに、西陣で「鰹節^{かつおぶし}を振る」ということばがある。桴を鰹節にみたてたことばである。

には映画館が4館・芝居小屋が6館・寄席が4館あった。これらの繁華街を行き来することを、タテへするという。これは、織物の経糸をそろえる作業に似ているところから生まれたことばである。その他、今宮祭・北野祭(毎月25日で、その夜は、西陣のヨシマ晩になる)。安楽花祭には、臨時の芝居小屋が建つ。それに、賭博場や遊廓もあった。

二十五日は天神さんよ お顔見たさにだて参り
 こらしょどっこいしよで儲けた金を 森のおやまさんに皆入れた
 糸操してても養てあげる いやな賭博はやめとくれ
 賭博うちさん今日は裸でも 明日はたんぜん長火鉢

これらの機織歌にも、西陣の「宵越しの金は持たぬ」という職人氣質がよく出ている。これは多分に、西陣の経済的変動の激しさによって生じるのであろう。

西陣では、一反の織物ができるためには、20業者以上の補助業者の手をわずらわせるので、総括的に言語環境を解説することは困難である。この言語環境を形成していたものは過重な労働と経済的な不安、加えて小資本で機業家になりうるという西陣の伝統的性格によるものであろう。

さらに、西陣には他の追従を許さない高度な伝統的織物技術があり、これにたずさわる職人には、独立して機業家に出世できるという夢と、これを成し遂げずにはおかないという意欲がある。この西陣職人の意欲こそ、西陣を日本における大機業集団に成長させたものといえる。

C. 祇 園 (§23)

1. 調 査 地 点 (§24)

(1) 調 査 地 点 (§25)

祇園花街(東山区)は、昭和初年には、祇園甲部と祇園乙部(通称膳所裏と呼ばれた)とに分かれていた。祇園乙部は、昭和33年に祇園東と改名されている。

祇園花街と呼ばれる地域は、四条通りをはさんで、ほぼ北は新橋通りから南は建仁寺境まで、東は東大路通りから西は大和大路通りに至る。祇園甲部(以下甲部と略す)と祇園乙部とは、図10のように区別されている。このうち、調査の対象としたのは甲部である。

甲部に属する町は、次のようである。

祇園町南側・祇園町北側(南北両側とも四条通りに沿った表側、乙部に属する部分を除く)・中之町・橋本町・清本町(乙部に属する部分を除く)・川端町・清井町・宮川筋一丁目・元吉町・末吉

(13) 西陣の機織唄の囃子の「ドッコイショ・ドッコイショ」からとったものであろう。また、「ドッコイショ」は六根清浄からきたと、西陣ではいい伝えられている。西陣では織り上げることを「山」という。そのことに関係があるものとも思われる。

(14) 下の森の遊廓である五番町をさしている。西陣の旦那衆は上七軒のお茶屋へ遊びに行く。それを「宿坊へ寄る」という。

町・^{とみなが}富永町・^{ときわ}弁財天町・常盤町・二十一軒町（このうち大和大路に沿った裏側を除く）の14町である。〔大正元年8月公布，京都府令第6号による。〕

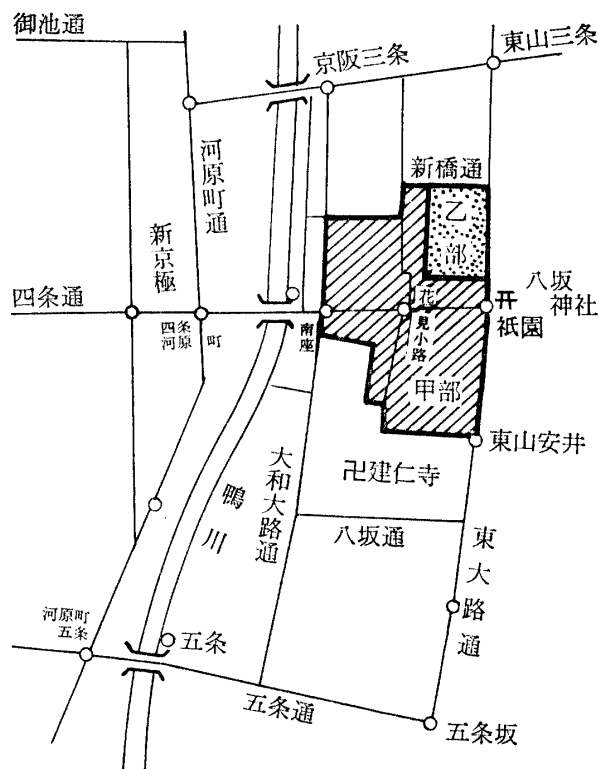
(2) 祇園花街の変遷 (§ 26)

祇園甲部の区域は，明治19年の京都府令によると，次の19町から構成されている。

祇園町南側・祇園町北側（膳所裏を除く）・中之町・富永町・清本町・弁財天町・元吉町・二十一軒町・^{ときわ}常盤町・橋本町・末吉町・川端町・^{りんか}林下町の一部・^{わし}清井町の一部・宮川筋一丁目・^お鷲尾町・^{しもがわら}下河原町・^{かみべんてん}月見町・上弁天町。

その後，大正元年8月の京都府令第6号によって，甲部の地域は14町となり，上記の林下町の一部，鷲尾町・下河原町・月見町・上弁天町の5町は削減された。現在の祇園甲部も，ほぼこの地域をさす。

祇園調査地点（昭和初年当時）（図10）



2. 祇園花街の構造 (§ 27)

図11のように，祇園甲部には，昭和初年当時は，お茶屋（揚げ屋）と子方屋（置き屋）^{こかたや}があり，お茶屋には子方屋を兼ねたところもあった。子方屋には，女主人の下に，舞子・芸子・仕込み^{オカーサン}があり，また花街には義太夫・たいこもち・男衆などが生活している。舞子・芸子には抱えと^{おまえ}自前との別がある。

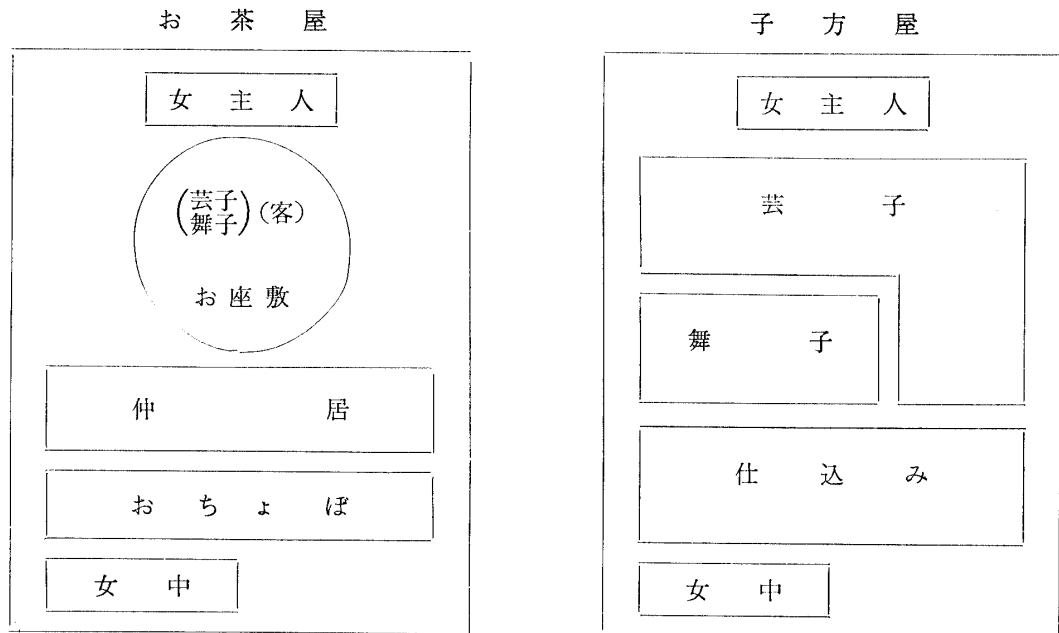
祇園甲部は，その最盛期であったといわれる昭和初年のころには，およそ舞子130人，芸子470人，お茶屋350軒があった。なお現在では，甲部にお茶屋150軒・旧称子方屋があり，舞子30人・芸子250人ほどが生活している。（昭和42年4月調べ）

ここでは揚げ屋・置き屋といわず，お茶屋・子方屋といていた。

お茶屋には，花街の事情に精通した女主人と，そのもとに仲居^{オカーサン}があり，客があると，見番を通じて芸子や舞子が指名される。また，昭和初年では，仲居のもとに，将来仲居になる「おちょぼ」（オチョボサン。オチョボハンとも）がいた。戦後は労働基準法や児童福祉法の成立，社会・産業構造の変化によって，おちょぼは姿を消すことになった。が，電話が普及するまでは，おちょぼがお茶屋と子方屋との連絡係を勤めた。

子方屋には，芸子あがりの女主人^{しこ}があり，芸子・舞子や「仕込み」（シコミサン）がいっしょに住んでいた。仕込みは，舞子や芸子になるため，数か月間，特定の茶屋で見習い修業をする

祇園甲部社会構造図（昭和初年当時）（図11）



- 【備考】 ① お茶屋で子方屋を兼ねたところもある。
 ② 義太夫・たいこもち・男衆もいる。
 ③ 舞子・芸子には抱えと白前がある。

が、この期間の仕込みを「見習い」（ミナライサン）、見習いをする茶屋のことを「見習い茶屋」という。

このほか、お茶屋と子方屋には、それぞれ女中（オナゴッサン・ゴハントキサン。俗にアバチャンとも）がいたが、この女中はあくまでも下働き^{したばたら}であって、仲居や芸子・舞子になるものではない。

花街には、また「自前芸子」や「自前義太夫」、さらに「たいこもち」（タイコモチサン）と「男衆」（オトコッサン。俗にオッチャンとも）がいる。なおこのうち、男芸子といわれる「たいこもち」は、現在は存在しない。老妓の話によると、戦前（大正中ごろ）に消滅したとのことである。

（1）人的構成（§28）

調査の対象としたのは、N家（祇園町南側）とY家（末吉町）とである。

お茶屋兼子方屋をしているN家の人的構成は、次のようである。前女主人が会長、養女の現女主人が社長、そのもとに芸子3人（富久丸^{ふくまる}、一富^{いちふく}、久ぎく^{ひさ}）、舞子1人（富丸^{とみまる}）、女中1人で構成されている。他の多くは個人経営であるが、N家は特に有限会社の組織をとっている。また、子方屋であるY家は、女主人、芸子4人（美代一^{みよいち}、喜代一^{きよいち}、富若^{とみわか}、美登子^{みとこ}）、舞子2人（久子^{ひさこ}、玉子^{たま}）、仕込み1人、女中2人の構成である。

前述のように、子方屋の女主人は芸子上りの人にかぎられた。これは、うぶな「仕込み」時代の女子を、一人前の舞子や芸子に仕立てるためには、芸子の経験をつんだものだけが適格だというしきたりによるものである。また、仕込みが見習いを経て正式の舞子や芸子になる時には、芸の世話から衣裳いっさいを女主人と姉芸子^{オカーサン}と姉芸子^{ネーサン}ととする。なお、姉芸子が妹芸子を引き立て

ることを「妹ヲヒク」という。舞子や芸子が、女主人を「オカアサン」といって、生みの親以上に慕ったり、姉芸子に献身的に仕えたりする関係（シンルイ）は、血縁関係の親や姉以上に密接なつながりをもっている。

舞子や芸子の間では、年齢に関係なく、1日でも早くお座敷に出た（見世出しした）者が「ネエサン」と呼ばれる。それで、年上のものが年下のものを「ネエサン」と呼ぶ場合もありうる。なお、姉芸子たちを呼ぶ場合は、芸名に「ネエサン」をつけて呼び分ける。（「富久丸^{フクマル}サンネエサン」のように）妹芸子は子方屋での食事の時や風呂へ入る時、お茶屋での客への応待、髪結い（カミユイハン・カミイサン）の場所にいたるまで、ネエサンにつき従い、厳然と姉芸子をたてる慣習がある。

舞子や芸子は祇園甲部芸妓組合から鑑札を受け、修業にはげんでいる。舞子は京舞のほか、はやし（つづみ・たいこ）・仕舞・地唄^{じうた}・長唄・常磐津・小唄などの芸を身につける。なお、現在では、女紅場^{にようば}学園で週に日を決めて実習し、舞子には京舞・はやし・お茶、芸子には、三味線が必修科目となっている。また、舞子から芸子になることを「襟カエ^{えり}」（赤いえりを白いえりにかえる）といい、なった芸子を「エリカエサン」と呼ぶ。

仕込みは、実娘と養女の別を問わず、家事などの日常の雑事から、なるべくきりはなされ、舞子や芸子になるための教養を身につけることにつとめる。仕込みは子方屋では、姉芸子の手伝いをしたり、その素振りを見おぼえることも勉強の一つで、芸事以外にも多忙である。仕込みは見習茶屋でする数か月の見習い期間を経て、舞子になるものと、直接芸子になるものと二つのコースがある。養女として引きとられる仕込みの出身地は同じ京都市で、花街に縁故があるものが大部分である。なお現在では、なり手が漸減しているので、全国から公募してはとの意見も一部にあるが、それでは京ことば一つ使いこなせなくては困るので実現しない。

女中は、N家は1人であるが、Y家のように数人いるところもある。女中の仕事は台所を中心とした下働きで、「オナゴッサン」「ゴハントキサン」とも呼ばれ、女主人をはじめ芸子・舞子・仕込みの身の周りの雑事を細かくみるので、目立たない存在ながら、重宝がられている。

このように、お茶屋と子方屋の業務には、女のみがたずさわり、その男主人はこれに関係しない。男主人は舞子・芸子から「オトウサン」と呼ばれ、芸妓組合の役員や一般会社と関係を持つ人もある。

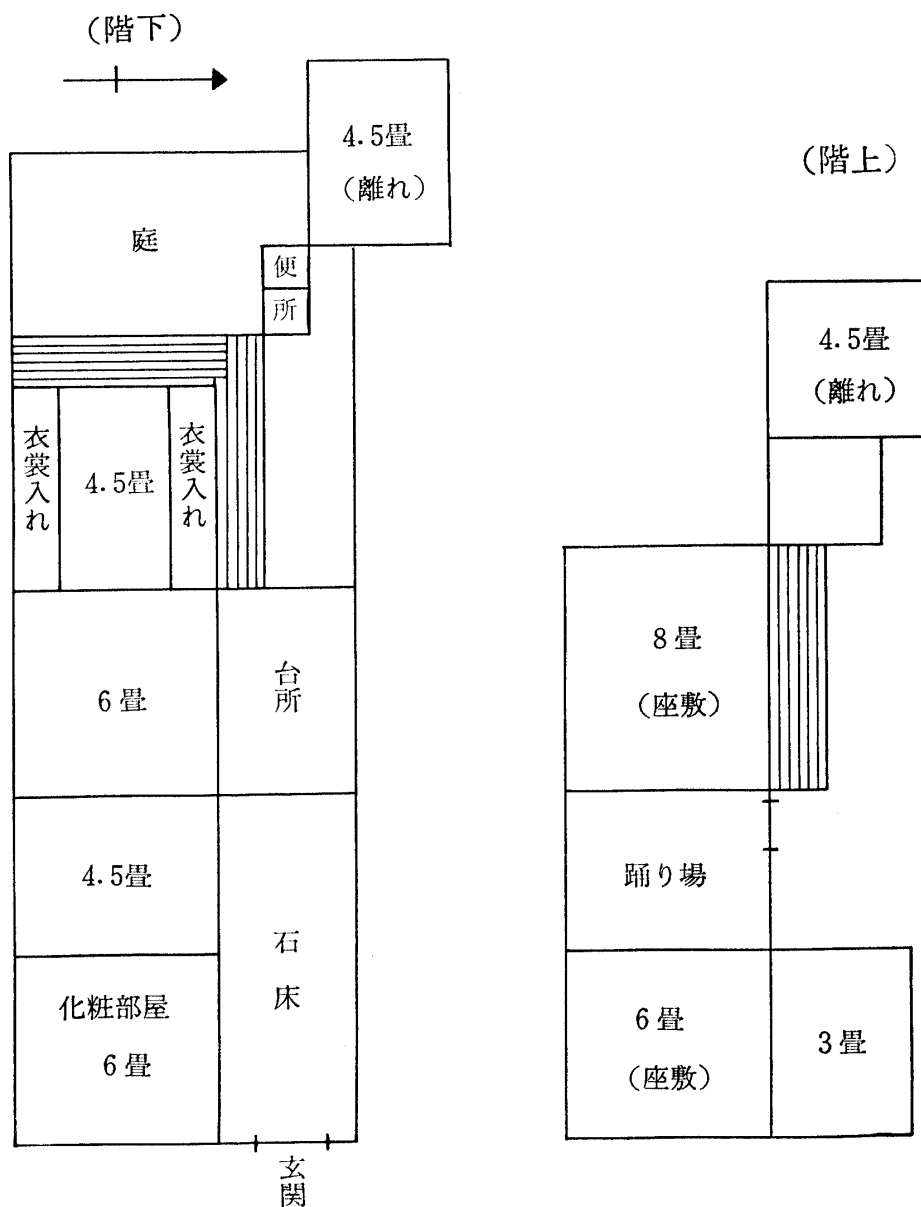
子方屋に出入りする男衆^{オトコ}は、舞子や芸子の着付けを手伝い、見世出し^{みせだし}の披露（オヒロメ）には、お茶屋や子方屋回りの先導役を勤めたりもする。また、お茶屋と子方屋との間にあって、花代や祝儀の金銭問題を解決したり、舞子や芸子たちの代わりに、区役所・税務署との交渉、その他の雑事をする。

(2) 家屋の構造 (§ 29)

調査対象としたN家の家屋の間取り（昭和5年建築）は図12 のようである。

N家の場合は、お茶屋で子方屋を兼ねているので、二階はお茶屋様式で、階下は子方屋の間取りになっている。

N 家 の 間 取 り（図12）



お茶屋の場合には、客に、舞子や芸子の芸を披露する踊り場がかならずあって、それも二階にかざられる。戦後は、踊り場に舞台をつけるお茶屋ができた。古くからのお茶屋で知られている万亭（まんてい いちりき）などがその例である。

また、子方屋にはかならず化粧部屋と衣裳部屋とがある。

3. 言 語 環 境（§30）

舞子や芸子の一日はわれわれの想像以上に忙しい。その一日の生活は、芸事の修業がない時には昼前後に起床し、髪結いや風呂や身づくろい（オコンライ）に時を過ごす。前夜が遅くなると、起きるのが遅いときでも、自分の下着類の洗濯や芸事の復習（ケイコノ オサライ）などをしてなければならない。それらが終わるのは昼過ぎになる。それから、髪結いや風呂へ行って、午

後5時ごろからはじまるお座敷や宴会にそなえて、身づくろいをすることになる。そして、予約されたお茶屋や宴会の席に出る。(オハナエ イク) 予約されたお花(ヤクソクバナ・オフレマエ)を終えて、子方屋に帰るころは深夜近くなることもあるという。

このような一日の中で、実際にくつろぐ時間は、子方屋へ帰ってから寝るまでのわずかな時間にかぎられるようである。年若い舞子たちはこの時間だけが自由に自分のことができるわけで、好きな本を読んだり、なかには日記をつけたりするものもあるという。

食事は、一般に粗末なものらしい。とくに行事のある時やお花が多くかかると、食事をとる時間もないらしく、文字通りお茶漬けサラサラということになる。

芸事の修業はきびしく、その道の師匠から「稽古をあすからはつけない」(オトメガ デル)といわれると、子方屋のオカアサンや姉芸子に伴われておわびをする。(オワビヲ イレル) そして許可を得るまでは稽古止めになるという。

芸事以外でも、礼儀作法、ことばづかいなどにいろいろきびしいしつけがある。お座敷に出てするおじぎは、客の顔がみえないほど、頭を深く下げる。客に対しては、どんなことをいわれても口答えをしてはならない。また、自分の知識をひけらかすことも礼儀に反する。さらに、お座敷では、片手で酌をしてはならないし、ざぶとんを自分はしかないことなどのしつけがされている。また、お座敷では、客から食事をすすめられても、食べないことになっている。やむをえない場合にも、半分だけ食べて「ゴツォハンドシタ。」と礼をいう。しかし、戦後は「ギョウギ ワルオスケド。」と、ことわって食べることもある。

甲部の舞子・芸子は京風の地髪^{じがみ}を結った。また、舞子には、「三本足^{さんぽんあし}」という化粧法がある。それは首の下に細長く三筋だけおもしろいをぬらず、地肌をみせる化粧法である。この三本足は、いわゆる紋目^{もんめ}にするもので、正月の3か日と7日・15日、「都おどり」の出番^{でばん}、お盆、八朔の時だけにする。有名なだらりの帯(ダ拉里)や帯止めには子方屋の家紋をいれる。その帯止めは代々家につたわるもので、家宝のように大切にしている。正装をした舞子や芸子の一人歩きは禁じられている。

このほか、花街特有の慣習として現在に残るものにつぎのようなものがある。

見世出し^{みせだし}の一週間ほど前には、婚礼の式(オサカズキ)をする。これは、町方の婚礼のように、見世出しする本人の姉芸子、見習い茶屋の女主人、本人の生みの親、世話人が集って行ない、男衆^{おとこ}が酌をする。婚礼の式後に、結納(オサメモノ)の式がある。これは、本人が引いてもらう姉芸子の所へ、結納金(オビリョウ)に末広をつけ、松の酒だるとともに おさめる行事である。

見世出しの当日には、いわゆる「オヒロメ」を行なう。男衆に案内されて、芸事の師匠の家やお茶屋・子方屋へ「ヨロシュウ、オタノモーシマス。」と、ふれまわる。そのとき、手ぬぐい(テンテン)を配るならわしである。その包み紙には「〇〇(姉芸子の芸名) 妹〇〇(自分の芸名)」のように記される。

「オヒロメ」のあいさつをうけたお茶屋や他の子方屋から、ただちにお祝として、いろいろ

な品物がとどけられる。見世出しをした子方屋では、もらったお祝いの品物や花輪をかざったりする。「オヒロメ」のあった子方屋では、数日後、お祝いのお返しの品(センジュ、千寿か)をとどけるが、これには紅白のまんじゅうをそえることになっている。

以上述べたような婚礼の式(オサカズキ)、結納の式(オサメモノ)、お祝いのお返し(センジュ)等にみられる古風な慣習は、祇園花街における人的結合の強さを示すものといえよう。

また、祇園花街には、「一に教養、二に気だて、三に顔だち」ということばがある。これをわかまえる舞子や芸子を、よくできた子(カンコイコ)という。祇園では、芸を客に見せることが第一のことであり、顔かたちはそれほど問題にしないという誇りを持っている。

【付】 年 中 行 事 (§31)

昭和初年の年中行事のうちから、年末年始の行事若干、次に室町・西陣・祇園別に、その代表的なもの1, 2を例示する。

1. 年 末・年 始 (§32)

(1) 年 末 (§33)

① 事 始 め (12月13日) (§34)

事始めは、江戸時代からの町方の風習で、正月の準備をはじめる日である。この日にすすはらいが行なわれる。

室町では、この日から正月の準備が始まる。この日に別家さんが本家さん^{オモヤ}に3升づきの鏡餅^{ふたがき}二重ねを持参してあいさつに行く。またこの日から年末にかけて、お歳暮を持参して、「オシツメマシテ、オコトーサンドス。」と、一年のあいさつをいう。

西陣でも、八朔の時と同じように、織屋の当主が世話になった主家^{オモヤ}へ3升づきの鏡餅を持って、「オシツマリマシテ、オコトーサンドス。キュー、スエサセテイタダキマス。」と、あいさつする。また、12月13日から12月31日まで、逢う人ごとに、「オシツマリマシテ、オコトーサ^{オミノオツユ}ンドス。」とあいさつをかわす。12月13日の夕食には、大根をきざんで浮かした味噌汁と塩いわしを食べる習わしがある。

祇園では、京舞の師匠井上八千代さん宅をはじめ、自分の修めた芸の師匠(舞子はおはやしの師匠、芸子は三味線の師匠)、姉芸子、見習い茶屋へお鏡をおさめて、「オメデトーサンドス。アイカワリマセズ。」と、お礼をいう。この時におさめるおかがみは、舞子が5升、芸子は3升といわれる。

② 大 晦 日 (12月31日) (§35)

室町では、歳徳棚^{としとく}をしつらえ、夕食後、神仏に灯明をあげ、鏡餅を供えて、1年間のお礼参りをする。そして、祇園さんへおけら火を受けに行く。「寝ないで起きていると、水の恩を返せる」といって、起きていた。夕食後、ヤドバイリ(別家)した番頭さんは主家^{オモヤ}へ1年間の最

後のお礼に行った。

西陣でも、夜の9時ごろ、ヤドバイリした別家さんが主家へ1年間の最後のあいさつに行く。そのとき、「おしつまりまして、おことうさんどす。本年はいろいろご厄介になりました。どうぞ、ごきげんよう、お祝いやしておくれやす。」とあいさつする。この「お祝いやして」とは、正月の雑煮を食べるときに「オイワイヤス」ということと関係がある。

祇園では、舞子や芸子たちは、12月30日～31日の夕方までに髪結いに行って、31日の午後8時ごろから、あいさつまわりをはじめる。師匠・姉芸子・見習い茶屋・ひいきにしてもらっている茶屋に「オコトーサンドス。ツユトシワ オオキニ。アイカワリマセズ。」とあいさつする。茶屋では、返礼として割り玉（赤白の餅花のようなもの）を用意して待っている。このあいさつまわりは夜明けごろまで続く。

なお、大晦日には、年越しそばを食べるが、特に西陣では、大晦日のほか、毎月末にも晦日そばを食べるならわしがある。西陣では来月も集金ができるようにとの縁起で食べるのである。西陣で、上等の金襴を織るときに、純金の箔を使う。その純金が機場や畳の上に落ちる。それを集めるときに、そば粉をまきちらし、そば粉といっしょに掃き集めると、純金の箔のこぼれたものがよく集まるところから起こったならわしだと、いわれている。

(2) 年 始 (§ 36)

室町では、元日には、歳徳さんをまつり、氏神さん、恵方詣りなどをする。雑煮を食べる前に、主人に対して、妻が最初に、店の者も一人一人、「明けましておめでとうございます。旧年中はいろいろとお世話になりました。本年もどうぞよろしゅうお願いします。」と、正月のあいさつをする。（これは現在もH家では続けている。）

正月3日間は朝、白味噌の雑煮を食べる。その雑煮に、かしら芋・大根・小芋を入れる（焼^オ豆腐^{ヤキ}を入れる家もある。）また3日間主人の前に、^{ネラミ}睨み鯛を据える。（なお、西陣では一人に一匹ずつのネラミ^{ほね}ダイをすえ、1月20日の骨正月にそれを食べる。）

元日に、別家の主人は町内のあいさつ回りをする。訪問者は口上を述べ、うけのあいさつがかわされる。この時、主婦は、玄関に火鉢・座ぶとん・名刺うけを出して、菓子・大福茶で接待する。あいさつする者も、うける方も紋付の着物を着用する。（別家の主人は元日に、羽織・袴で、主婦は5日に主家（T家）へ新年のご祝儀を申し入れた。）

元日の昼食には、塩ぶりの酒煎^いり、あわびのお汁、それに3種のさかな（かずのこ・ごぼう・ごまめ）となます（大根^{オダイ}と人参）とがつく。

西陣では、元日の朝5時ごろに、年男と呼ばれる主人が、井戸から若水^{わかみず}をくみ、神棚に供えて拝み、恵方を向いて拝む。その若水で、年男が一家の雑煮を作る。

元日・2日・3日の午後4時に、一家全員が集まり食事をする。それをお節^{せち}という。この時間には、来客もいったん帰ってもらう。

なお、正月には、織機に鏡餅をかざる。それをかざったまま、1月4日に、四越^{ヨコシ}（杼^ヒを4往復）または4寸ほど織る。この四の数字には、本年も良（四）く織れるようにとの願いがこめられ

ている。このあとで、正月のあいさつをし、正月の料理が出る。仕事始を「機始め」^{テハジメ}「織初め」^{はたはじ}ともいう。そして、翌5日からは、いつものとおり、朝の7時ごろから夕方の7時ごろまで織る。

祇園では、大晦日からのあいさつまわりが元日の夜明け近くまで続く。それで、いったん寝て、昼過ぎに起きだして雑煮を祝う。おにしめ、おとそ、三種がつく。舞子・芸子は五つ紋の紋付きを着て、稲のかんざしを挿して、師匠・姉芸子・見習い茶屋・ひいきのお茶屋、髪結いの順に、「オメデトーサンドス。アイカワリマセズ。」と、あいさつ回りをする。最近では、元日が花街の休日となり、あいさつまわりは2日にするようになった。

2日から16日の始業式までは、「オ花ニイク」のにも、紋付きを着る。ただ、正月の3が日と7日、15日の日以外は、代衣裳^{カエンヨ}といって、五つ紋の正装に対して三つ紋がついた略式にすることがある。

（2） 室 町（§37）

祇 園 祭（§38）

室町の年中行事のうち、最も関心をひくのは祇園祭である。そのうち、7月16日の宵山^{ヨミヤ}と翌17日の山鉦巡行^{やまぼこ オマツリ}は祇園祭の頂点をなす。室町すじの山と鉦には、役行者山・黒主山・鯉山・山伏山・菊水鉦・鶏鉦・白樂天山がある。山鉦巡行の順位はくじ取りによって毎年変わるが、先頭の長刀鉦^{ながなた}と最後の船鉦^{ふな}の二基は変わらない。黒主山の行列は、くじ渡しを先頭に、町会長・渡山行事・山行事・御山^{おやま}・町内御供の順序である。元船鉦連合会長で新町在住のH氏の談では、船鉦は午前8時半ごろに町内を出発するが、鉦に集まって扇を持って音頭をとり、厄除の粽^{ツマキ}を投げていくのは花形役者になった気持ちだという。なお、粽は水引をかけて各家の軒につる。このことは、厄除・病魔退散のまじないになる。7月16日は宵山で、この夜は鉦町の人々は徹夜をする。10日と28日には神輿^{みこし}を洗い清める神輿洗^{みこしあら}いの儀式がある。神幸祭^{しんこうさい}は7月17日の夕方から、24日の還幸祭^{アトノマツリ}までつづく。16日の宵山、23日の後の宵山には、鉦町では「屏風祭」がある。先祖伝来の屏風を立てまわし、高張り提灯をたて、幕をはり、毛せんやじゅうたんを敷いて室内を飾り、格子戸をはずして屏風拝見の人々にみせる。18日は、室町では仕事を休んだ。（これをゴエンといった。）が、祭は客あつかいに忙しいので、祭の来るのを嫌う人もあった。祇園祭には、はもずしや奈良漬を近所に贈る習慣があり、丁稚にこれを配らせた。祭の期間中は、祇園さんの紋がきゅうりなので、きゅうりを食べない。浅瓜をなますにしたものをその代わりに食べる。祇園祭の情緒は祇園ばやし^{かね}の鉦の音に代表されるが、山鉦の町内では、鉦の音を聞かないと、夏が来た感じがしないとまでいう。占出山^{うらで}の町席^{ちようせき}（町家・会所^{ちよういえ}）では、幼女が宵山に次のような文句を唱えて、おみくじやお守り売を売る。

「安産^{アンサン}のおんはら帯は、これよりでます。常は出ません、今晚かぎり。ご信心のおん方さまは、受けてお帰りなされましよう。」

また、他の山鉦では「ろうそく一本、献じられましよう。」という。

なお、祇園祭では、祇園祭の期間、舞子や芸子は代衣裳^{カエンヨ}の紋付きを着て、子方屋ごとのそろ

えの花かんざしをつける。なお、祇園花街では、6月ごろから、祇園祭が始まるまでに、自分の芸名のはいった^{うちわ}団扇を、お茶屋・お客・髪結い・風呂屋にいたるまでくばる慣習がある。

(3) 西 陣 (§ 39)

① 七 夕 祭 (7月7日) (§ 40)

西陣では、^{いちいだになのしや}櫟谷七野社(上京区大宮通り盧山寺上る西入る。西陣ではカスガサンとかシメノシヤという)で、七夕笹に、西陣の織屋さんが、織物の見本織や^{メザシ}残糸織などを色彩豊かに飾りつける。なお、七野社の社記(昭和30年)によると、「平安京ノ昔ヨリ年中行事トシテ当社ハ盛大ニ棚機祭ヲ行ハレテ有リマシタ。古歌ニ、

七橋ヤ七野文月七日ノ夜棚機ヲ織ルヤ願ヒノ糸合セ

等、色々ノ歌が残ツテ居リマス。」と書かれていることを、西陣の人は信じているようである。

② 造 り 物 (8月20日~23日) (§ 41)

西陣では、その中心地である^{ささやちよう}笹屋町で、町内の^{きぼり}木彫地藏尊(明治初年、^{もどりばし}一条戻橋から、笹屋町へ行きたいとのお告げがあり、乞食坊主から届けられたといわれる地藏尊)を供養するために、織物・絹糸・家具などで人形を作る。これを「^{つく}造り物」という。これは、明治10年ごろから行なわれている。(戦争中は中止したが、現在も続いている。)

(4) 祇 園 (§ 42)

① 都おどり (4月1日~4月30日) (§ 43)

4月1日から30日間、総出の舞子・芸子が交代で、甲部歌舞練場で行なう。第1回は明治5年で、昭和42年で95回目となる。この間、昭和19年から昭和24年までの6年間は第2次世界大戦で休演した。なお、都おどりの稽古は長期間きびしく続き、その役づけには大きな関心が寄せられている。

なお、秋には、11月18日~20日ごろに温習会がある。この期間、午後4時ごろから9時ごろまで、甲部歌舞練場で行なわれる。この会には、舞子・芸子の3分の1程度が参加し、ごひいき筋の客に、この1年の芸事修行を披露する。この会にでることは、客のお花がついていて、この機会に衣裳を新たに買ってもらふことにもなる。現在では、10月5日から行なわれるようになった。

② お 盆 (8月15・16日) (§ 44)

祇園花街のお盆のあいさつまわりの順序は、正月と同じである。正装をして「ボンセンワ マイド オオキニ。マタ ドーズ アイカワリマセズ。」と、あいさつをして回る。午前10時ごろから昼までにするのが多い。

黒塗りの盆に水をはり、^{だいもんじ}大文字をさかさに写してそれを飲む。こうした病気除けは、京都一般に行なわれるが、祇園では、遠来の客といっしょに、川床に出て行なったものである。なお、お盆には、客にお花をつけてもらって、紋付きを着ないで、気楽な遊びをする舞子や芸子もいるが、これを^{モンビヌケ}紋目抜けという。

む す び (§ 45)

以上、昭和初期の状態を中心にして、室町商人・西陣職人・祇園の舞子・芸子の言語環境を調査し、三地域それぞれの特性を明らかにするように努めた。これらの三つの集団が京都の伝統を保持する注目すべきところであるというだけでなく、次のような各地域特有の気質が存在し、それが伝統を強く支えていることがわかった。三地域に共通していえることは、いずれも室町という名、西陣という名、祇園という名を重んじ、その名にふさわしい品位を高めるようにつとめるという気風である。

室町では、商人の粘り強い不屈の商魂が室町の伝統を維持してきた。特に、良い商品 verkaufenということ、粗悪な商品が売れば、室町のノレンにもかかわるという良識が強く支配している。戦後の混乱期にみられたようなヤミ取引の商売は、室町商人の好まないところであり、何ごとも商道に徹し、良心的であることを誇りとしている。近くに西陣機業地を控えていることも良い商品 verkaufenことにつらなる。

西陣では、西陣機業集団全体が大きなノレンである。ここでは、無資本でも機業がはじめられ、努力次第で大きなノレンを持つまでにもなれる。職人の技術が伝承され、長期間仕込みの徒弟として仕込まれるうちに、何ごとにも耐え抜く職人氣質が培われる。分業性が多岐にわたり、緊密な生産過程のもとに、連帯的な集団を形成しているので、西陣以外の地へ出ては仕事は成り立たないといわれる。また老幼まで生産に携われる仕事があり、一家こぞって西陣機業の組織の中に生活を営んでいる。機業の織物補助業者は、このような緊密な集団の下では、この地を離れることができない状態である。経済変動の激しさにも耐え抜く精神は西陣気質の一つである。なお、西陣では高級品を扱うことへの誇りがあり、西陣職人が機業と芸術の二面性を兼ねていることも、その特色の一つに数えられよう。紋様書きをする正絵師しやうえとの関係で、日本画家と接触することも芸術性への誇りをはぐくむものである。さらに宮中の御用機ごようばたを受け持ってきたことも職人の自覚と誇りを助長するものであった。

祇園の舞子や芸子の誇りは、自分たちが観光日本の重要な役割を受け持っているとの自覚からも生まれる。舞子や芸子は子方屋やお茶屋・女紅場によこうばにおいて、徹底的なしつけを受ける。祇園のかもしだす集団的な組織とゆかしい情緒のもとで、所作ふるまい、言葉づかいに至るまで、伝統的な祇園気質がしみこんでいく。きびしい芸の修練の結果、高い階層の人々、有名人にじかに接触し得るという誇りがある。上層の固定客を持つのも祇園だからこそであり、他の花街と比較して寛容さと上品さが感ぜられる。祇園育ちの内娘うちむすめがほとんど舞子や芸子になるというのも、この地の世襲性の根強さを象徴している。また、祇園の内部では各家とその成員の間に密接な関係がある。

西陣や室町はいずれも繊維・織物を取り扱う集団である点で共通している。西陣では祇園のだらりの帯を生産し、室町問屋の京染呉服を祇園で愛用するなど、三地域の関係は深い。ま

た、祇園の客すじの一つは室町問屋の旦那であるという。

以上述べたように、これら三つの集団には、それぞれ根強い伝統的な商人氣質・職人氣質・芸子氣質がみられ、これが言語環境や言語生活に反映していることを知るのである。

〔付2〕 京都府方言資料目録（年月順）

この目録は、いわゆる京ことばに関するものをはじめ、京都府下全域にわたって、広く方言に関する研究文献目録・文学作品書目、録音・放送・研究発表・講演等の目録を収録しようとしたものである。

この目録の作成に当たっては、榎垣実氏の『京言葉』、東条操氏の『方言と方言学』（増訂版）、日本方言研究会の『日本の方言区画』等所掲の方言文献目録に負うところが多い。また国立国語研究所図書館・国会図書館・京都府立資料館・榎垣実氏・奥村三雄氏・足立鉄次氏その他、多数の方々の厚意と援助に預った。ここに記して感謝の意を表するものである。

ここには発表年月順に収録した。が、まだ不備な点が多い。ひとまず発表して各方面のご教示によって補正したい。

（○印のものは方言専載単行本）

目 次

1. 単行本・雑誌論文	147ペ
2. 京都方言文学作品書目	158ペ
3. 録音・放送、研究発表・講演等	160ペ
4. 索引	162ペ
(a) 郡市別索引	162ペ
(b) 分類索引	163ペ

1. 単行本・雑誌論文

- 1 蜃藻屑（御所ことば）3巻 恵命院権僧正守正著 応永27（『尼門跡の言語生活の調査研究』所収）
- 2 大上藤御名之事（女房ことば）室町初期成（『尼門跡の言語生活の調査研究』所収）
- 3 片言 安原貞室 慶安3刊本（『日本古典全集』第4期第7冊 昭6・10、『国語学大系』19巻）
- 4 婦人養草 梅嶋散人著 5巻 貞享3年冬成 元禄2・5刊（『尼門跡の言語生活の調査研究』所収）
- 5 女重宝記（女ことばづかひの事付タリやまと詞）5冊 艸田林子（苗村丈伯）著 元禄5刊（『女房詞の研究』所収）
- 6 世話重宝記 5冊 元禄8・9刊 京大久原文庫本
- 7 諺草 貝原好古著 元禄14・1刊
- 8 物類称呼 越谷吾山 5冊 安永4刊
- 9 見た京物語 二鐘亭半山（木室卯雲）天明元刊
- 10 西陣天狗筆記（写）井関相模介政因 弘化2年成（西陣織物館・西陣小学校蔵）

- 11 守貞漫稿（近世風俗志）喜田川秀莊著 嘉永6成
- 12 高機台帳序文 江戸末期 西陣小学校蔵
- 13 丹波通辞 編者不詳 江戸末期稿本（「日本古典全集」第4期第7冊 昭6・10）
- 14 浮世鏡第3 編者不詳 江戸末期（「日本古典全集」第4期第7冊 昭6・10）
- 15 京都俗語「真島桜園叢書」巻15所収 明22年以前（和紙4枚、国立国語研究所蔵）
- 16 山城国京都方言表 大久保初男 「東京人類学雑誌」4-42 明22・8
- 17 方言調査報告書 吉沢義則調査 明30年ごろ（八瀬・大原方言の調査書焼失）
- 18 丹後加悦谷方言調査書 菅谿教育研究会 明36・4（緒言）（B6判 62ぺ）
- 19 東京と京都 宇野著山 「風俗画報」270号 明36・6
- 20 方言調査報告書（京都地方方言及訛言調査表）京都市校長会方言調査委員（田村・山中・森田）明36・9刊（洋・仮 46判 13ぺ）
- 21 竹野郡方言調査書 竹野郡各小学校長会編 明38・1刊（B6判 23ぺ）
- 22 音韻調査報告書・音韻分布図（京都府の部）国語調査委員会編 明38・3刊『音韻調査報告書』・『音韻分布図』所収
- 23 方言訛言調査録 京都府教育会久世郡会調査部編 明39・4（緒言）（洋・仮 46判 35ぺ）
- 24 京都府下方言一覧 京都府師範学校編 明39・5（緒言）（洋・仮 B6 40ぺ）
- 25 口語法調査報告書・口語法分布図（京都府の部）国語調査委員会編 明39・12刊『口語法調査報告書』・『口語法分布図』所収
- 26 京都府天田・何鹿・加佐三郡方言調査書 府3中、明43・5刊（42ぺ）
- 27 与謝郡桑飼村方言・訛言 与謝郡桑飼尋常高等小学校編 『御大典記念 桑飼村教育資料』（稿本）所収 大正4年御大典記念
- 28 与謝郡岩屋村方言調 『岩屋村郷土誌』（稿本）所収 大正4年御大典記念
- 29 与謝郡宮津町・城東村方言及訛言 与謝郡宮津女子尋常高等小学校編 『郷土誌宮津町城東村』所収 大4・11序
- 30 与謝郡本庄方言訛言 与謝郡本庄尋常高等小学校編 『郷土誌』（稿本）所収 大正4年御大典記念
- 31 与謝郡日ヶ谷方言 与謝郡日ヶ谷尋常小学校編 『郷土誌』（稿本）所収 大正4年 御大典記念
- 32 与謝郡日置村方言・訛言 与謝郡日置村農業補習学校編 『郷土史資料』（稿本）所収 大正4年御大典記念
- 33 与謝郡山田村方言・訛言 『山田村郷土誌』（稿本）所収 大正4年御大典記念
- 34 与謝郡石川村方言 与謝郡石川尋常高等小学校編 『石川尋常高等小学校郷土誌』（稿本）所収
- 35 与謝郡市場村方言調査 与謝郡市場尋常高等小学校編 『郷土誌市場村』（稿本）所収

大7・2

- 36 三重郷土誌（方言） 中郡三重郷土史刊行会編 大11・5刊
- 37 中郡五箇村郷土誌（方言） 中郡五箇村小学校編 大11・9刊
- 38 伏見誌（方言） 京都府紀伊郡伏見町役場編 大12・6刊
- 39 京都府与謝郡誌（下巻）（方言・訛言） 与謝郡役所編 大12・12刊
- 40 八瀬大原の栞 詳細不明 大14刊
- 41 何鹿郡誌（方言） 何鹿郡教育部会編 大15・7刊
- 42 石川村誌（方言） 与謝郡石川村役場編 大15・10刊
- 43 御所ことば 井上頼寿 大15（謄写7ペ）
- 44 伏見民政誌（風俗及節用） 大15・4
- 45 東京西京言葉の戦ひ 吉沢義則「黒潮」 昭2・2
- 46 京都言葉 阿倍都喜子「ローマ字世界」 昭3・3
- 47 方言雑記（京都市） 山本靖民「旅と伝説」 昭5・8
- 48 正しき国語（訛言矯正読本） 京都府立園部中学校（洋・仮 菊判 32ペ） 昭5・11刊
- 49 岩瀬文庫蔵「丹波通辞」他2種の方言稿本 東条 操「国語と国文学」 昭6・1
- 50 京都・大阪・奈良地方における農家の慣用語について（予告） 森本子治「京大農学部
洛友会報」 昭6・10
- 51 京都語に於けるアクセント 佐久間鼎「音声の研究」 第4輯 昭6・12
- 52 淀川沿岸地方におけるドス・ダスの分布 泉井久之助「方言」 昭7・1
- 53 我等の郷土（〔京都市〕方言） 京都市小学校教員会研究部編 昭7・5刊
- 54 郷土調査（方言） 加佐郡由良小学校編 昭7・6刊
- 55 上方言葉のアクセント 大原孝道「国語教育」 昭7・6
- 56 京都及土佐に於けるアクセント現象 ポリワノフ、守屋長訳「方言」2-8 昭7・8
- 57 郷土教育資料（方言） 久世郡郷土研究会編 昭8・1刊
- 58 郷土教育資料（方言） 綴喜郡槇島小学校編 昭8・1刊
- 59 岩屋村誌（方言） 与謝郡岩屋村役場編 昭8・1刊
- 60 栗田村史（方言） 与謝郡栗田小学校編 昭8・2刊
- 61 上代国語の未来辞と大和山城の方言 小林好日「日本文学の再認識」 昭8・4
- 62 国語位相論 菊沢季生 昭8・7「国語科学講座Ⅲ」所収
- 63 校本物類称呼諸国方言索引 吉沢義則編 昭8・9 立命館出版部刊
- 64 京都方言襟記 高萩精玄「方言」3-9 昭8・9
- 64-2 京ことばより（方言系はがき） 高萩精玄（方言）3-9 昭8・9
- 65 寛政刊本だいがく 泉井久之助「方言」3-9 昭8・9
- 66 深草誌（方言） 宗形金風 昭8・11刊
- 67 近世の京阪語法 真下三郎「方言」3-12 昭8・12

- 68 デス・ドス・ダスの語源 永田吉太郎 「音声学協会会報」 昭8・12
- 69 近畿方言について 泉井久之助 『ことばの講座』第2輯 所収 昭8・12
- 70 宮津町の方言訛語 横井赤城 「田舎」 昭9・1
- 71 そやさかいに 柳田国男 「方言」 4-1 昭9・1
- 72 加佐郡中筋村昆虫方言 瀬野英雄 「昆虫界」 昭9・2
- 73 京都方言襍記以後 高萩精玄 「方言」 4-4 昭9・4
- 74 「京ことば」〔ゑはがき〕より 高萩精玄 「方言」 4-4 昭9・4
- 75 丹波何鹿方言 S・N 「国語教育」 昭9・4
- 76 本州西部の方言 東条 操 『国語科学講座』41 (洋・仮 A5 50ぺ) 昭9・5
- 77 鳥歌話(方言雑記の2) 東条 操 「国語と国文学」 11-6 昭9・6 (伴中義作,
文政4年刊, 2巻, 京ことばと江戸語各30語を対比)
- 78 『世話類聚』の片言について 泉井久之助 「方言」 4-12 昭9・12
- 79 室町初期に於ける国語史の考察(京都語と坂東語の対立) 岸田定雄 「方言」 5-3
昭10・3
- 80 京都花街語考(京都方言の内) 真下三郎 「方言」 5-3 昭10・3
- 81 舞鶴地方アクセント 玉岡松一郎 「土の香」 昭10・6
- 82 京都言葉の敬語法 三ヶ尻浩 「国語研究」 3-6 昭10・6
- 83 近畿方言考(用語の部) 橘 正一 「国語研究」 3-6 昭10・6
- 84 近畿方言の問題 東条 操 「国語研究」 3-6 昭10・6
- 85 近畿方言資料目録 菊沢季生 「国語研究」 3-6 昭10・6
- 86 刊行方言書目解題「近畿地方」 東条 操 「方言」 5-10 昭10・10
- 87 江戸弁に於ける京都語の要素 橘 正一 「江戸時代語研究」 昭10・10
- 88 丹後木津村農事語彙 村上正一 昭11刊(和綴半紙本, 16ぺ)
- 89 東京京阪言葉違 窮食庵野立・岩井半英 「国語研究」 4-1 昭11・1
- 90 京言葉 魚谷 忠 「趣味と学問」 3 昭11・3
- 91 京言葉・大阪言葉 魚谷 忠 「趣味と学問」 5 昭11・5
- 92 京都の風俗 孫斉紀 「洛味」 2-2 昭11・5
- 93 京都遊女考 大伴可奈目 「洛味」 昭11・5月6月
- 94 理由を表はす助詞「さかいに」 亀井 孝 「方言」 6-9 昭11・9
- 95 丹後におけるアクセント境界線 太田武夫 『音声の研究』 昭12・1
- 96 風流懺法と京都方言 橘 正一 「国語研究」 昭12・2
- 97 膝栗毛に見えたる京都方言の代名詞 菊沢季生 「国語研究」 5-3 昭12・3
- 98 デス・ダス・ドス 橘 正一 「コトバ」 昭12・3
- 99 白川村カミンチョの方言 浅田 茂 「方言」 7-4 昭12・4
- 100 諸方言の比較からみた平安朝アクセント 金田一春彦 昭12・6

京都市室町・西陣・祇園における言語生活の調査研究（1）

- 101 国語に於ける東西方言交渉史上の諸問題 中村通夫 「国語と国文学」14-7 昭12・7
- 102 京訛り大阪訛り（東海道五十三次の九） 平山蘆江 「旅と伝説」10-10 昭12・10
- 103 ドスの領域 岸田定雄 「方言」7-12 昭12・12
- 104 京都観光（京ことば） 昭13・3刊
- 105 方言の音声転写（京都） 榎垣 実 「音声学協会会報」51 昭13・3
- 106 京言葉の一時期 真下三郎 「国語と国文学」15-10 昭13・10（明治40～大正12年の上京を）
- 107 片言及浮世鏡の訛音の考察 斎藤義七郎 「音声学協会会報」56-57 昭14年3月・5月（2回）
- 108 関西方言 境田四郎 「解釈と鑑賞」昭14・8
- 109 上方語法の二三に就いて 山鳥鋭男 「国語研究」8-4 昭15・4
- 110 「さら」（新）考 榎垣 実 「国語研究」8-5 昭15・5
- 111 姓・名の京都アクセント 天沼寧 「音声学協会会報」62・63（合併） 昭15・6
- 111-2 国語アクセントの地方的分布 金田一春彦 『標準語教育と国語教育』所収 昭15・9
- 112 丹波通辞の訛音の考察 斎藤義七郎 「音声学協会会報」65・66（合併） 昭16・3
- 113 『類聚名義抄』のアクセントと諸方言アクセントとの対応関係（主として3音節名詞について） 大原孝道 『日本語のアクセント』所収 昭17・3
- 114 補忘記の研究（江戸時代初期の近畿アクセント資料として） 服部四郎 『日本語のアクセント』所収 昭17・3
- 115 『補忘記』の研究・続貂 金田一春彦 『日本語のアクセント』所収 昭17・3
- 116 近畿アクセント形式観の問題（「漸層観」に就いて） 池田 要 『日本語のアクセント』所収 昭17・3
- 117 近畿アクセントにおける下上型乙の性質 小川武雄 『日本語のアクセント』所収 昭17・3
- 118 近畿アクセントに於ける名詞の複合形態 和田 実 「音声学協会会報」昭17・10
- 119 京都市児童を対象とせる^{ヨミカタ}方言訛言矯正資料 上島志郎 昭17・11（序）（洋仮・謄46倍 79ペ）
- 120 国語アクセントの史的変遷 金田一春彦 『国語アクセントの話』所収 昭18・3
- 121 京都の言葉 織田作之助 「銃後の京都」8 昭18・4
- 122 古典と上方語 岸田定雄 「上方」昭18・4
- 123 京阪俗語風俗 竹内 逸 「上方」昭18・4
- 124 上方言葉随想 高谷重夫 「上方」昭18・4
- 125 契沖仮名遣書所載の国語アクセント 金田一春彦 「国語と国文学」昭18・4
- 126 複合語アクセントの後部成素としてみた二音節名詞 和田 実 「方言研究」昭18・6
- 127 近畿アクセント（下） 和田 実 「国語文化」昭19年・1月・2月

- 128 近畿方言の形容詞 榎垣 実 「方言研究」10 昭19・7
- 128-2 京ことば（絵はがき、会話） 昭19ごろ 秀英堂刊
- 129 京言葉（「京都叢書」第5編） 榎垣 実著 昭21・12刊 京都高桐書院（B6, 303ページ）
概説編，音声・アクセント・訛音・語法・語彙，京言葉研究書目その他からなる。）
- 130 京都のわらべ歌（青年双書） 榎垣 実 関書院 昭22（110ページ）
- 131 京言葉（榎垣 実著）〔書評〕 都竹通年雄 「国語」 昭22 創刊号
- 132 京言葉（榎垣 実著）〔書評〕 金田一春彦 「国語と国文学」 昭22・5
- 133 京女の言葉 榎垣 実 「京都」10 昭22・6
- 134 京阪方言比較考 榎垣 実 昭23・5 「温古志叢書」第4編（膳，語法の比較，半紙32ページ）
- 135 大文字屋 榎垣 実 「人間風景」1 昭23・8
- 136 京言葉 猪熊兼繁 「読書」 昭23・10
- 137 京言葉 榎垣 実 改訂再版 昭24刊（B6・304ページ） 京都高桐書院
- 138 中川北山町方言（中川・小野郷文化調査報告書第4冊） 榎垣 実 昭24・3 京都市観光局計画課刊（京都市周辺の音声・語法・語いを分析，B6 24ページ 膳）
- 138-2 私たちの郷土（京都府） 京都師範学校男子部附属研究部編 昭24・4刊（B6, 172ページ）
- 139 方言はどんなに標準語化されたか（京阪方言を例として） 榎垣 実 昭和24年度国立国語研究所地方調査員委託調査報告書（稿本）
- 140 京都方言の中で特に助動詞に表われたる共通語と方言との交渉 栗林貞一 同上
- 141 京阪方言比較考と信州方言読本〔書評〕 東条 操 「国語学」3 昭24・11
- 142 京都方言研究史と残された問題 奥村三雄 昭和24・25年度国立国語研究所地方調査員委託調査報告書（稿本）
- 143 京都方言の概観 榎垣 実 昭和25年度国立国語研究所地方調査員委託調査報告書（稿本）
- 144 京都府方言分布の実態・京都方言の特徴形・敬語法・不定形の実態 奥村三雄 同上
- 145 京都府言語状態の研究 奥村三雄 同上
- 146 京都府方言研究の概観 栗林貞一 同上
- 147 京都府方言の性格（地方言語特徴形の実態） 奥村三雄 同上
- 148 丹後言葉と丹波言葉 奥村三雄 同上
- 149 舞鶴アクセント 奥村三雄 「近畿方言」2 昭25・4（2ページ）
- 150 舞鶴方言三つ四つ 杉原二郎 「近畿方言」3 昭25・5（2ページ）
- 151 京阪アクセントの新しい見方 金田一春彦 「近畿方言」3 昭25・5
- 152 京ことば 新村出 「京都」1 昭25・8
- 153 京女の言葉 田代晃二 「京都」2 昭25・9

京都市室町・西陣・祇園における言語生活の調査研究（1）

- 154 丹後言葉の境界 奥村三雄 「近畿方言」7 昭25・9月・10月
- 155 京都方言 榎垣 実 「国語学」4 昭25・10（12ページ、歴史性・優雅性・変遷・特殊方言について）
- 156 京言葉とその他 馬渡博親（常磐商1年）「方言研究」（中毎方言研究クラブ機関紙）昭25・12・10
- 157 京言葉集 田中明（洛陽高1年）「方言研究」 同上
- 158 京・大阪ことばちがい 前田 勇 「近畿方言」9 昭26・3（4ページ）
- 159 敬語表現の一形式 奥村三雄 「近畿方言」10 昭26・4（4ページ）
- 160 京言葉 榎垣 実 「ら・びじっと」9 昭26・6・1（6ページ）
- 161 京女の言葉 榎垣 実 「京都」10 昭26・7（7ページ、3都の比較）
- 162 京女の言葉 野尻抱影 「京都」11 昭26・8
- 163 全国方言辞典 東条 操編 昭26・12刊 東京堂刊
 - 163-2 木津の伝説 付方言 井上裕夫 昭27・1刊 竹野郡橘青年会
- 164 「これからの敬語」所感 奥村三雄 昭和27年度国立国語研究所地方調査員委託調査報告書（稿本）
 - 165 ことば風土記（落語の京都弁） 下村白日亭 「言語生活」9 昭27・6（1ページ）
 - 166 京ことば 夏目千代 「京都」23 昭27・9
 - 167 父母・京都の家 向井潤吉 「言語生活」21 昭28・6（3ページ）
 - 168 附説・京都方言の「からに」 榎垣 実 「近畿方言」19 昭28・6
 - 169 京言葉の「へん」と大阪言葉の「へん」（ことば風土記） 水谷憲司 「言語生活」23 昭28・8（1ページ）
- 170 岡田上村の方言 舞鶴市岡田上村編 昭28・10刊
 - 171 京都市同和地区方言 京都府民政部刊 昭28・10（『京都府同和地域の生活実態—調査報告』所収）
 - 172 全国方言資料（近畿編・京都） 昭28 NHK編〔自由会話（店員のしつけ、祇園のはなし）、あいさつ等〕
 - 173 京都府海産魚類慣用語集覧 京都府水産試験所 昭24・2刊（B6、46ページ）
- 173-2 京都府北桑田郡周山町周山方言の体系（音韻・文法） 奥村三雄 昭和29年度国立国語研究所地方調査員委託調査報告書（稿本）
 - 174 京ことば 長田幹彦 「言語生活」33 昭29・6（3ページ）
 - 175 関西在住者の見た京都言葉・大阪言葉（座談会） 井上甚之助・桑原武夫・前田勇・山本照・岩淵悦太郎 「言語生活」33 昭29・6（13ページ）
 - 176 京都の女ことば 唐木田友子 「言語生活」33 昭29・6（4ページ）
 - 177 関西弁と東京語とのせり合い 榎垣 実 「言語生活」33 昭29・6（4ページ）
 - 177-2 第二標準語論 梅棹忠夫 「言語生活」33 昭29・6（8ページ）

- 178 方言の実態 —近畿— 榎垣実 「国文学解釈と鑑賞」217 昭29・6
- 179 京都方言の研究 —方言分布区画の可能性を考えつつ— 奥村三雄 「京都学芸大学報」
A No.1 五 昭29・7 (12ペ)
- 180 口丹波語の諸相 (ことば風土記) 馬淵一夫 「言語生活」38 昭29・11 (1ペ)
- 181 京都弁 久留島秀三郎 「暮しの手帳」 昭29・12
- 182 近畿中央部のアクセント覚え書き 金田一春彦 『東条操先生古稀祝賀論文集』昭30・
4 刊所収
- 183 京言葉のコツ 寺尾宏二 「洛味」48 昭30・4
- 184 京都弁の寝言 真下五一 「洛味」48 昭30・4
- 185 丹波方言の概観 奥村三雄 「近畿方言双書」 昭30・4 (12ペ)
- 186 近畿地方の方言 榎垣 実 国語学会編『国語学辞典』所収 昭30・8 刊
- 187 現代京都方言の活用 同『国語学辞典』所収 昭30・9 刊
- 188 京言葉はどう変わるか 榎垣 実 「東京と京都」58 昭30・11
- 189 京ことば 竹中 郁 「洛味」51 昭31・1
- 190 ヤス (なさる) の由来 榎垣 実 『方言論文集』1 (近畿方言双書・第4冊, 近畿方
言学会, 孔版) 所収 昭31・2 刊
- 191 近畿のことば 榎垣 実 『日本文化風土記』5 近畿篇所収 昭31・6 刊
- 192 〔与謝郡〕四辻郷土誌 (方言) 山添輝一 昭31・8 刊
- 193 かなづかい・おくりがな・語いの基準表 (付 方言集) 京都市立小川小学校 昭31刊
- 194 京都 (方言) 榎垣 実 『方言の旅』所収 昭31・9 刊
- 195 谷崎潤一郎の作品の関西弁 和田 実 「言語生活」61 昭31・10 (10ペ)
- 196 方言の旅・近畿方言 —八瀬大原の方言 中村直勝 「NHK 国語講座」2-6 昭31・
11 (2ペ)
- 197 長田幹彦の作品の京都弁 宮地敦子 「言語生活」61 昭31・10 (6ペ)
- 198 大阪弁と京都弁のよさ悪さ 鼓党良 「東京と京都」72 昭31・12
- 199 名義抄時代の京都方言に於ける二字四段活用動詞のアクセント 南不二男 「国語学」
27 昭31・12 (12ペ)
- 200 京 (祇園) ことば 榎垣 実 「放送朝日」 昭32・1・10
- 201 近畿方言調査簿 西宮一民編 昭32 (51ペ, 近畿方言学会刊)
- 202 敬語と敬語意識 国立国語研究所編 昭32・3 刊
- 202-2 家業—京都室町織物問屋の研究 立命館大学人文科学研究所編 昭32・3 刊
- 203 方言分布区画 —京都方言を例として— 奥村三雄 「兵庫方言」5 昭32・4 (7ペ)
- 204 方言の旅 —京ことばと京文化 (京都) 梅棹忠夫 「NHK 国語講座」3-3 昭32・5
(2ペ)
- 205 西鶴と京ことば 高野 伸 「解釈と鑑賞」253 昭32・6 (3ペ)

- 206 京都（方言） 榎垣 実 「言語生活」71 昭32・8（2ペ）
- 207 現代文学と方言（現代文学と京都弁） 伊吹武彦「NHK 国語講座」3-5 昭32・9
- 208 尼門跡の言語生活からみた女房詞の研究（一） 井之口有一・堀井令以知 「西京大学
学術報告 人文」9 昭32・11
- 209 尼門跡使用の「シャル」「マシャル」「であらシャル」敬語法について 井之口有一
「国語学」33 昭33・3
- 210 方言の区画 奥村三雄 「国語国文」27-3 昭33・3（16ペ，京都方言区画も）
- 211 西は西（座談会） 阪倉篤義・串田孫一・秋永一枝・野瀬アサ 「言語生活」82 昭33
・8（12ペ）
- 212 織物地獄・西陣 出川光治 「芸術殿」 昭33・8
- 212-2 職業とコトバ（『コトバと社会』所収） 宮地 裕 昭33・8
- 213 京ことば 中田余瓶編 昭33・10刊（B6，77ペ）
- 214 尼門跡の言語環境について 井之口有一・堀井令以知・中井和子 「西京大学学術報告
人文」10 昭33・11
- 215 京ことば 語手 奥山初子・田中隆子・平田よし子 「きょうと」14 昭34・1
- 216 西陣語源考証 相馬大 「高志人」連載 昭和34・5ごろ
- 217 京おんな（ことば） 和田さく 「京都新聞」 昭34年9月1日～10月7日 連載（26回）
- 218 京おんな（ことば） 京都新聞編集局 昭34・11 河出書房新社刊
- 219 尼門跡の音声言語資料 井之口有一・堀井令以知・中井和子 「京都府立大学学術報告
人文」11 昭34・11
- 220 京言葉（なまり）大番附 杉本宇造編 昭34・6
- 221 西陣の風習についての考察 出川光治著 昭35・1 京都市嘉楽中学刊
- 222 京ことばの保存提唱 真下五一 「東京と京都」109 昭35・1
- 223 網野町町史（方言） 竹野郡網野町役場編 昭35・4刊
- 224 京阪の「です」標準語移入説 ―土着説に答える― 前田 勇 「国語国文」308 昭35
・4（11ペ）
- 225 国宝・京の女言葉 谷屋 充 「東京と京都」113 昭35・5
- 226 京都へ（方言） 柴田 武 『方言の旅』 昭35・9刊所収
- 227 京ことば 青木正児 「洛味」100 昭35・11
- 228 尼門跡の言語生活の調査研究 井之口有一・堀井令以知・中井和子 昭36・1刊
- 228-2 現代上方弁における一つの同居現象について―「ます・や」と「です・や」 前田 勇
学大国文 昭和36・2（6ペ）
- 229 京ことばと東京ことば 岡田春潮 「洛味」104 昭36・3
- 230 方言の実態と共通語化の問題点（京都・滋賀・福井） 奥村三雄 昭36・4刊 『西部
方言』（『方言学講座』巻3）所収（40ペ，京都府・滋賀県・福井県の概説・音韻・語

法を詳論)

- 231 京都府下「中川郷」の敬語 藤原与一 「近畿方言」10 昭36・4
- 231-2 続東西ことば争い 真下三郎 「国文学攷」 昭36・6 (5ペ)
- 232 京洛風流抄(京都双書 五) 山田一夫著 昭36刊
- 233 郷土の方言(豊里)〔綾部市〕山下良枝外2名 昭37・1
- 234 京ことば 高桑義生 朝日新聞(京都版) 昭37年1月9日以降連載
- 235 京都府方言 奥村三雄 『近畿方言の総合的研究』所収 昭37・3 (48ペ)
- 236 京ことば 井之口有一 「解釈の鑑賞」臨時増刊号 昭37・4
- 236-2 京都のすべて 山上伊豆母編 「国文学解釈と鑑賞」318 至文堂
- 237 御所ことば語彙の調査研究(1 食物) 井之口有一・堀井令以知・中井和子 「京都府立大学学術報告 人文」14 昭37・10
- 238 音調差異とその法則 —京都市方言を例として— 榎垣 実 「国語研究」(国学院大学) 15 昭38・3 (48ペ)
- 239 御所ことば語彙の調査研究(2) 井之口有一・堀井令以知・中井和子 「京都府立大学学術報告 人文」15 昭38・10
- 239-2 京ことば 国分綾子 昭38・11 『ふるさとを訪ねて(15 京都)』一少年少女文学風土記— 新村出編 泰光堂出版
- 240 べらんめえとそうですか —江戸ことばと上方ことば— 榎垣 実 「解釈と鑑賞」28— 15 昭38・12 (20ペ)
- 241 べらんめえとそうですか 『江戸と上方・東男と京女』所収 昭39・2刊 至文堂
- 242 丹後網野の方言 井上正一著 近畿方言学会刊 昭39・3
- 243 京都方言の尊敬表現について 森野敬子 「やよい」1 昭39・3 京都府立大学女子短期大学部国語国文学会編
- 244 廓言葉の研究 湯沢幸吉郎著 昭39・4刊
- 244-2 近世上方語辞典 前田 勇著 昭39・4刊 東京堂
- 245 鳥羽風土記(方言) 岡本富三郎 鳥羽郷土史頒布会 昭39・6刊
- 246 女房詞の研究 国田百合子 風間書房刊 昭39・8 (A 5判, 741ペ)
- 246-2 京都ことば 畑 富吉 昭39・9 『五十年前の思い出を語る』所収
- 247 京ことば大阪ことば 大阪読売新聞社編 浪速社刊 昭40 (161ペ)
- 248 「ナー・ナーへ・ナーシ」「ノー・ノシ」「ネー」考 松本容子・後藤里子・村峯千恵子・宇野満喜子 「やよい」2 昭40・3 京都府大女子短大国語国文学会編
- 249 近畿方言の敬語表現 榎垣 実 昭40・6 「日本方言学会第1回発表会」レジメ所収
- 250 東京弁と京ことば たなかしげひさ 「東京と京都」173・174 昭40・5・6
- 251 尼門跡の言語生活の調査研究 井之口有一・堀井令以知・中井和子共著 風間書房 昭40・8刊 (A 5判, 674ペ)

- 252 尼門跡使用の御所ことばと『蟹藻屑』 井之口有一 『近代語研究』第1集所収
昭40・9刊
- 253 上方洒落本における文末敬語法 奥村三雄 「岐阜大学学芸学部研究報告 人文科学」
13 昭40
- 254 近代京阪語考 ―順接表現の助詞について― 奥村三雄 「岐阜大学学芸学部研究報告
人文科学」14 昭40
- 255 文末敬語系譜考 ―近代京阪語研究の一環として― 奥村三雄 昭40・11・10（日本方
言研究会発表レジメ）
- 256 夜久野・歴史地誌篇（方言） 夜久野町教育研究会編 昭41・1刊
- 256-2 近世上方文学と現行関西弁 前田 勇 「言語生活」172 昭41・1
- 257 京都市における敬語の予備調査 松本容子・渡辺粧子 「やよい」3 昭41・3
- 257-2 遊里語の研究 真下三郎 昭41・3刊 東京堂
- 258 尼門跡使用の待遇表現について 井之口有一 「風俗」5-4 昭41・3
- 259 敬語辞系譜考 ―近代京阪語研究の一環として― 奥村三雄 「国語国文」35-5
昭41・5
- 260 文末敬語系譜考 ―（近代）京阪語の研究の一環として― 奥村三雄 「三重県方言」21
昭41・6
- 261 尼門跡の言語生活の調査研究〔書評〕 真下三郎 「国語学」65 昭41・6
- 262 全国方言資料（第4巻）近畿編（京都） 日本放送協会編 日本放出版協会刊 昭41・9
- 262-2 方言からみた関西と関東（『関西と関東』所収） 宮本又次 昭41・10 青蛙書房刊
- 263 近代京阪語の使役辞 奥村三雄 「国語国文」昭42・1
- 264 女性語辞典 真下三郎編 昭42・2刊 東京堂
- 264-2 方言資料としての雑俳 鈴木勝忠 「国語国文」昭42・2
- 265 京都市室町・西陣・祇園・上賀茂における敬語の位相的調査（第1部 言語環境編）
京都府立大学女子短大国語国文学会（井之口有一）編 昭42・3刊
- 265-2 「祇園ことば」調査を進めるにあたって 木村恭造 昭42・3 「昭和41年度京都市
立高等学校図書館研究レポート集」所収
- 265-3 音韻史資料としての「補忘記」―注記の分類と検討― 松井茂治 「国語国文」391・
392 昭4・3～4
- 266 京ことばを考える〔座談会〕 池田弥三郎・岸田武夫・岡部伊都子・金田一春彦・熊谷
幸博，司会 家喜富士雄 NHK「文研月報」昭42・4
- 266-2 日本言語地図 国立国語研究所編 昭42・4 大蔵省印刷局刊
- 266-3 女房ことばの変遷 ―「するする」の場合― 松井利彦 「国語国文」昭42・4
- 267 近代京阪語考（二，二段活用の残存） 奥村三雄 「岐阜大学教育学部研究報告 人文科
学」15 昭42

- 267-2 京のわらべ唄 相馬大 昭42・6刊
267-3 城南（民俗篇） 城南文化研究会編 昭42・6
268 京ことば 京都新聞 昭和42・7・1～31（26回，日曜以外連載）
269 京都市室町・西陣・祇園における言語生活の調査研究（1）〔付〕京都府方言資料日録 井之口有一 「京都府立大学学術報告 人文」19 昭42・10
270 京ことば 井上頼寿 「京一中同窓会誌（あかね）」 昭42秋号
○271 京ことば談義 遠藤嘉基 「京都市民読本」（稿本，原稿60枚，200字づめ）
272 京都の民俗（1） 平山敏治郎 「京都市民読本」（稿本，原稿123枚，200字づめ）
273 西京俚言考（詳細不明，稿本，松井簡治蔵）
○274 大原ことば（稿本，明治時代のもの，京都市左京区大原小学校蔵）
274-2 綾部民俗語い集（稿本，最近のもの） 山下良枝
274-3 綾部の方言（稿本，最近のもの） 山下良枝
274-4 京ことば（名所めぐり絵はがき8枚，現代版）

2. 京都方言文学作品書目

- 275 河東方言箱枕 大極堂有長 文政5・6刊 皇都近江屋治助・山城屋佐衛門刊（『日本名著全集』第1期第12巻『洒落本集』その他に所収，洒落本，京都市祇園方言）
276 風流懺法 高浜虚子 雑誌「ホトトギス」 明40・4，岩波文庫，『明治大正文学全集』（春陽堂），『現代日本文学全集』（筑摩書房）等に所収。（小説・祇園舞子と延暦寺小僧登場，京都市方言。雑誌「国語研究」5-2 橘正一氏論文を参照のこと）
276-2 俳諧師 高浜虚子 明41刊（小説，京都市方言）
277 舞鶴心中 近松秋江 大4刊（小説，京都市方言）
278 木屋町夜話 長田幹彦 大4刊（小説，京都市方言）
278-2 葛城太夫 近松秋江 大5刊（小説，京都市方言）
279 祇園夜話 長田幹彦 大9 『祇園夜話』（春陽堂）を出版，既発表の小説「糺の森」「送り火」等11編を収めた。最初の発表は大2「雛勇」（中央公論）。『明治大正文学全集』第33巻（春陽堂）。『現代日本文学全集』第43巻（改造社）。『長田幹彦全集』第13巻（非凡閣）等に所収。（小説，京都市祇園方言。雑誌「言語生活」61 宮地敦子氏論文参照のこと）
279-2 黒髪 近松秋江 大11刊（小説，京都市方言）
280 蓼喰ふ虫 谷崎潤一郎 昭3・12～同4・6，大阪毎日新聞連載。昭4，改造社から単行本として出版。その他『日本現代文学全集』第43巻（講談社）等に所収。（小説，京都市方言。雑誌「言語生活」61 和田実氏論文参照のこと）
281 酒屋 田口竹男 昭9・12 「劇と評論」（戯曲，京都市中京ことば）
282 京都三条通り 田口竹男 昭10・1 「劇文学」『田口竹男戯曲集』所収（戯曲，京都

市中京ことば

- 283 翁 家 田口竹男 昭10・12 「劇と評論」（戯曲，京都市方言）
- 284 高梁一家 田口竹男 昭11・8 「劇作」54（戯曲，京都市中京ことば）
- 285 湖心荘 田口竹男 昭12・5 「劇作」63 『田口竹男戯曲集』所収（戯曲，京都市中京ことば）
- 286 虫すだく 田口竹男 昭13・1 「劇作」71（戯曲，京都市中京ことば）
- 287 柳 田口竹男 昭15・7 「劇作」99（戯曲，京都市中京ことば）
- 288 祇王村 田口竹男 昭17・6 「演劇」『田口竹男戯曲集』所収（戯曲，京都市中京ことば）
- 289 寿の町 田口竹男 昭18・4 「演劇」（戯曲，京都市中京ことば）
- 290 仲人さん 田口竹男 昭20・12・18 B K放送（ラジオ・ドラマ，京都市中京ことば）
- 291 賢女気質 田口竹男 昭22・5 「劇作」復刊2（戯曲，京都市中京ことば）
- 292 囲まれた女 田口竹男 昭22・9 「時論」『田口竹男戯曲集』所収（戯曲，京都市中京ことば）
- 293 文化議員 田口竹男 昭23・4 「劇作」（復刊10）『田口竹男戯曲集』所収（戯曲，京都市中京ことば）
- 294 かりの宿 田口竹男 昭23・10 「劇作」（復刊16）（戯曲，京都市中京ことば）
- 295 賢女気質—田口竹男戯曲集 田口竹男 昭24・3刊 世界文学社 京都市方言の戯曲
「賢女気質」（昭22・5「劇作」〔復刊2〕）・「文化議員」（昭23・4「劇作」〔復刊10〕）・「囲まれた女」（ラジオドラマ 昭22・9「時論」）「京都三条通り」（昭10・1「劇文学」）・「翁家」（昭10・12「劇と評論」）・「湖心荘」（昭12・5「劇作」）を所収
- 296 京都の虹 田中澄江 昭25・4 「劇作」（戯曲，京都市方言）
- 297 夜の河 沢野久雄 昭27 （小説，京都市方言）
- 298 琵琶湖疏水下流 人見嘉久彦 昭30・11 「新劇」（戯曲，京都市方言）
- 299 榊原政常一幕劇集 榊原政常 昭30 未来社刊（京都市方言の戯曲「しんしゃく源氏物語」「次郎案山子」「川上観賞」等所収）
- 300 鍵 谷崎潤一郎 昭31・1～12 「中央公論」連載。単行本として中央公論社から昭和31・12刊（小説，京都市方言）
- 301 鴨東綺譚 谷崎潤一郎 昭31・2～3 「週刊新潮」に連載（小説，京都市方言）
- 302 京都物語 真下五一 昭32・8刊（小説，京都市方言）
- 303 祇園還幸祭 人見嘉久彦 「新劇」昭33・1（戯曲，京都市中京ことば）
- 304 西陣のうた 仲武司 昭35年ごろ（戯曲，京都市方言）
- 305 古都 川端康成 昭36（朝日新聞，107回で完結）新潮社刊（昭37）（小説，京都市〔旧葛野郡も〕方言）
- 306 いろは天狗 下村百日亭 「東京と京都」昭37・6～8・12（随筆，京都市方言）

- 307 友絵の鼓 人見嘉久彦 昭39・8 「新劇」(戯曲, 京都市方言)
- 308 京都物語(→) 水上勉 昭41・8～9 「京都新聞」に連載したもの(小説, 京都市方言)
- 308-2 『アンジェラ』『サリー』『フランチェスカ』(3部作) 人見嘉久彦 昭41・10～42・1 「悲劇喜劇」(戯曲, 京都市中京ことば)
- 308-3 帆 人見嘉久彦 昭42・6 「悲劇喜劇」(戯曲, 京都市中京ことば)

3. 録音・放送, 研究発表・講演等

(1) 録 音

- 309 京都室町ことば(店員のしつけ, 朝のあいさつ) 話手 沢田政三(呉服商・明29生) 坂本フミ(呉服商・明34生) NHK総合放送文化研究所録音 昭28・11・26(『全国方言資料』第4巻に音盤付録)
- 310 曇華院門跡のお話(対話) 話手 飛鳥井慈孝(曇華院門跡・明31生) 吉村宗明(曇華院一老・明29生) 昭32・10・9 曇華院で録音(『尼門跡の言語生活の調査研究』216ページ所収, 井之口有一録音所持)
- 311 御所ことばの生活を語る座談会 出席者 石野慈栄(大聖寺門跡・明20生) 花山院慈薫(宝鏡寺門跡・明43生) 飛鳥井慈孝(曇華院門跡・明31生) 冷泉恭子(水無瀬神社社家出身・明21生) 山本種子(萩原元子爵女・明29生) 徳大寺実厚(元公爵, 元侍従・明20生) 吉村宗明(曇華院一老・明29生) 藤森信次郎(霞会館主事・明21生) 司会・井之口有一 昭32・11・8 霞会館で録音(『尼門跡の言語生活の調査研究』159ページ所収, 井之口有一録音所持)
- 312 尼門跡の新年3日の御事(対話) 話手 石野慈栄(大聖寺門跡・明20生) 花山院慈薫(宝鏡寺門跡・明43生) 堀江要邦(大聖寺一老・明23生) 昭33・1・3 大聖寺おしん殿で録音(『尼門跡の言語生活の調査研究』185ページ所収, 井之口有一録音所持)
- 313 大聖寺門跡の新年のご祝儀申入れ 石野慈栄(大聖寺門跡) 堀江要邦(大聖寺一老) 滋岡清順(大聖寺二老) 三好修範(大聖寺若い人) 昭34・1・1 大聖寺お二の間で録音(『尼門跡の言語生活の調査研究』139ページ所収, 井之口有一録音所持)
- 314 京都室町ことば 話手 西村麻江(千吉商店大奥さん・明23生) 小倉忠次郎(千吉商店別家・明21生) 小倉米(同妻・明30生) 聞き手 井之口有一(昭36・11・13録音, 井之口有一録音所持)
- 315 宝鏡寺門跡のお話(対話) 話者 喜多宗岳(宝鏡寺一老・明25生) 沢田恵瑠(宝鏡寺二老・明43生) 昭37・12・24 宝鏡寺お三の間で録音(『尼門跡の言語生活の調査研究』197ページ所収, 井之口有一録音所持)

京都市室町・西陣・祇園における言語生活の調査研究（Ⅰ）

- 316 大聖寺門跡の思い出（対話） 話者 石野慈栄（大聖寺門跡・明20生） 堀江要邦（大聖寺一老・明23生） 昭37・12・27 大聖寺お台子で録音（『尼門跡の言語生活の調査研究』188ページ所収、井之口有一録音所持）
- 317 京都中京ことば 話手 吉田弘道（和菓子商・明37生） 昭40・9・29 録音、京都府立総合資料館録音蔵
- 318 御所ことば（対話） 話手 飛鳥井慈孝（曇華院門跡・明31生） 吉村宗明（曇華院一老・明28生） 昭40・10・8 録音、京都府立総合資料館録音蔵
- 319 京都中京ことば（対話） 話手 松下瑞穂（有職装束商・明21生） 松下たま（元法衣商・明31生） 昭40・10・12録音、京都府立総合資料館録音蔵
- 320 祇園の今昔 話手 古川俊次郎（前舟鉾会長、白生地卸商・明33生） 古川淑恵（同妻・明33生） 原田康之助（舟鉾会長・27生） 竹中光子（呉服商・明40生） 聞手 井之口有一 昭41・7・28録音（井之口有一録音所持）
- 321 京都上賀茂の社家このば 話手 山本嘉代（社家生育、明29生） 北大路寿子（社家生育・明30生） 聞手 井之口有一 昭41・10・12録音（井之口有一録音所持）
- 322 祇園の舞子にきく 話手 豆 勇（祇園舞子） 聞手 木村恭造 昭41・10・24録音
- 323 京都近郊農村ことば 話手 田中松之助（洛北静原地区）他4人 昭41・12・10録音 京都府立総合資料館録音蔵
- 324 祇園芸子にきく 話手 竹 若（祇園芸子・小唄師匠、大15生） 聞手 木村恭造 昭41・12・14録音
- 325 京都中京ことば（対話） 話手 檀野 福（元友禅業・明36生） 五十嵐勇次（友禅業番頭・明39生） 昭42・1・26録音 京都府総合資料館録音蔵

（2）放 送（最近のものの一部）

- 326 京都府（方言の旅） 榎垣 実 NHKラジオ第2放送 昭31・10・27
- 327 八瀬大原の方言 中村直勝 NHKラジオ第2放送 昭31・12・27
- 328 京ことばと京文化（方言の旅） 梅棹忠夫 NHKラジオ第2放送 昭32・6・27
- 329 現代文学と京都弁（現代文学と方言） 伊吹武彦 NHKラジオ第2放送 昭32・9
- 330 御所ことばと婦人語 井之口有一 NHKラジオ第2放送 昭33・1・9
- 331 京ことば いま・むかし（京都今昔話） 新村出 京都放送 昭34・7・30と31
- 332 京都へ（方言の旅） 柴田 武 NHKラジオ第2放送 昭39
- 333 京都のことば 柴田 武 NHKラジオ第2放送 昭40・9・10
- 334 御所ことばの研究者（時の人） 井之口有一 NHKラジオ第1放送 昭40・10・23
- 335 京ことば（録音風物誌） 井上頼寿 近畿放送 昭41・5・29
- 336 ふるさとのことば（京都） 片岡仁左衛門 NHKテレビ 昭41・8・10
- 337 上方ことばと東ことば（ことばの教室） 阪倉篤義 NHK FM放送 昭41・9・24

- 338 ことばのスケッチ（尼門跡のことば） 宝鏡寺門跡花山院慈薫・林丘寺門跡唐橋慈正
レポーター 梅原 猛 NHKテレビ 昭41・10・12
- 339 関西のことば（京ことばと敬語） 前田 勇 デスト 秋山十三子・大村しげ NHK
テレビ 昭41・12・16
- 340 京都のことば（こども討論会） 助言者 吉田弘道，中井和子 昭42・1・29

(3) 研究発表・講演（最近のものの一部）

- 341 尼門跡の言語生活と公家言葉について 井之口有一 国語学会公開講演会で 昭32・11
・17講演
- 342 尼門跡に残存する女房詞の性格 堀井令以知 言語学会で 昭32・11・17発表（「言語
研究」33レジメ所収）
- 343 御所ことばを調査して 井之口有一 近代語学会で 昭36・7・1発表
- 344 比丘尼御所の敬語について 井之口有一 京都府立大学学術講演会で 昭38・11・7講
演
- 345 京言葉 井上頼寿 祖先文化会大宮御池神泉苑で 昭39・1・15講演
- 346 御所ことば 井上頼寿 園部生身天満宮で 昭40・5・16講演
- 347 御所ことばの敬語体系 井之口有一 日本風俗学会大会で 昭40・10・17発表
- 347-2 京都府奥丹後袖志方言の古語法（古態の表現法）について 室山敏昭 昭40・11・6
国語学会研究会発表（「国語学」66，発表要項所収）
- 348 京ことばを考える（公開座談会） 講師 池田弥三郎・岸田武夫・岡部伊都子・金田一
春彦・熊谷幸博 NHK京都放送第2スタジオで 昭42・2・6

4. 索引（各文献の番号によって，所要 文献が検出できるようにした）

(a) 都市別索引

(1) 京 都 市

- ① 上京区 212 216 221 265 269 304 305（以上西陣），1 2 4 5 43
64 73 105 193 208 209 214 219 228 237 239 251 252 258 261 311
312 313 315 316 330 334 338 341 342 343 344 347
- ② 中京区 161 194 202-2 248 257 262 269 281 282 283 284 285 286
287 289 290 291 292 293 294 295 303 305 308-2 308-3 309 314（以上
室町），307（先斗町），204 317 319 325 340 348
- ③ 下京区 202-2 265 269 308-2 308-3 320（以上室町），62-2 80（以上島原），
278（木屋町）

京都市室町・西陣・祇園における言語生活の調査研究（1）

- ④ 左京区 17 40 64-2 196 274 276-2 327（以上八瀬大原）， 99（白川村），
321（上賀茂），323（静原）， 64 64-2 73
- ⑤ 右京区 257（大枝）
- ⑥ 東山区 64-2 96 200 212-2 246-2 265 265-2 269 276 278-2 279 279-2
322 324（以上祇園）， 64-2
- ⑦ 伏見区 298（深草）， 38 44 66 267-3
- ⑧ 南区 245 267-3（鳥羽）
- ⑨ 北区 138 231（以上中川）
- ⑩ 旧市内（上記以外） 16 20 47 53 64-2 74 77 82 89 90 91
97 104 106 107 111 119 121 128-2 132 139 140 141 152 153 158
160 161 162 165 166 171 175 176 181 183 184 188 189 194 197 204
205 206 207 211 213 217 220 222 225 226 227 229 234 236 239-2
243 244-2 246 246-2 247 250 264 264-2 266 268 270 271 272 274-4
281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296
297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 328 329 331 332
333 335 336 337 339 346 348
- (2) 舞鶴市 81 149 150 170
- (3) 綾部市（旧何鹿郡を含む） 26 41 75 233 274-2 274-3
- (4) 宮津市 29 70 (5) 北桑田郡 173-2
- (6) 久世郡 23 57 (7) 綴喜郡 58
- (8) 船井郡 48 (9) 天田郡 26 256
- (10) 加佐郡 26 54 72
- (11) 与謝郡 18 27 28 29 30 31 32 33 34 35 39 42 59 60
70 192 (12) 中郡 36 37
- (13) 竹野郡 21 163-2 223 242 347-2 (14) 山城 62
- (15) 丹波 13 49 112 148 180 185
- (16) 丹後 88 95 148 154 242 347-2
- (17) 全域，全般的なもの 8 22 24 25 50 52 63 67 69 76 83 84
85 86 111-2 122 123 124 128 138-2 141 142 143 144 145 146 147
158 163 164 168 172 173 177 178 179 186 201 202 203 210 230 235
236 297

（b）分類索引

- (1) 音韻・アクセント 22 23 27 29 30 51 55 56 68 81 95 96-2 100
102 105 107 111 111-2 112 113 114 115 116 117 118 120 125 126

- 127 128 129 132 138 139 142 143 147 149 151 155 170 173-2 175
 179 180 182 186 199 203 210 219 227 230 235 236 238 240 241 251
 262 265-3 266 266-2 271 274-3 309 310 311 312 313 314 315 316 317
 318 319 320 321 322 323 324 325 374-2
- (2) 語 法 25 61 67 82 94 96 97 98 106 109 128 129 132 134 135
 138 139 140 141 143 144 147 155 159 164 169 170 173-2 175 179
 180 186 187 202 203 209 228-2 230 231 235 236 240 241 243 244-2
 248 249 251 253 254 255 257 258 259 260 262 263 265 266 267 271
 339 347-2 374-3
- (3) 語 彙 1 2 3 4 5 6 8 13 14 16 23 27 28 29 30
 31 32 33 34 35 36 37 38 39 41 42 45 46 47 48 49
 50 53 54 57 58 59 60 63 64 65 66 70 71 72 73 74
 77 78 80 88 89 90 91 93 99 103 109 128 129 132 134 136
 138 138-2 139 143 147 150 152 153 155 163 163-2 165 166 170 171
 173 174 175 179 186 192 193 196 203 206 211 212-2 217 218 220
 223 227 233 234 235 236 237 239 244-2 245 246 246-2 247 250 251
 252 256 257-2 265-2 266 266-2 270 271 272 273 274 274-2 307-2 342-2
 374-2
- (4) 御所ことば(女房詞) 1 2 4 5 43 62 129 208 209 214 219 228
 236 237 239 242-2 244-2 246 251 252 258 261 264 266-3 310 311 312
 313 315 316 318 321 330 334 338 341 342 343 344 346 347
- (5) 文学と京ことば 96 97 102 195 197 205 207 244-2 256-2 264-2 275 276
 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292
 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308
 308-2 308-3 329
- (6) 教 育 3 4 5 18 20 21 24 27 29 30 31 32 33 34 35
 37 41 48 53 54 58 119 139 140 193 252